

# きべりはむし

第36巻 第2号  
2014



「きべりはむし」編集委員会

委員長 中峰 空  
編集委員 大谷 剛・近藤伸一・杉本 毅・竹田真木生・内藤親彦・三木 進

## ニホンジカ高密度地帯のノコンギク花畑に集中する 多数のオオウラギンスジヒョウモン その2 (2013年)

近藤 伸一<sup>1)</sup>

### はじめに

オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome ruslana* は兵庫県内に生息するチョウ類の中では、比較的分布が限られ、近年は個体数の減少が著しい種である。秋季になると兵庫県中部の神河町峰山高原のノコンギク *Aster ageratoides* 群落に、多数のオオウラギンスジヒョウモンの♀が吸蜜のため集まる。当地域はニホンジカ *Cervus nippon* (以下シカ) の長年にわたる食害で、草原と森林の下層植生はシカの嗜好性植物で覆われ、チョウ類の吸蜜に適した植物はほとんど見られないが、盛土造成地に出現したノコンギク群落が一斉開花して花畑を形成する。

2012年にこの花畑に集まるオオウラギンスジヒョウモンの翅にマークする方法で個体別の追跡調査を実施したが、2013年も同様の調査を実施した。

### 調査地

調査地は兵庫県神埼郡神河町、暁晴山(標高1077m)の西斜面に位置し、草原、キャンプ場、森林がモザイク状になっている平坦な高原の盛土造成地の一角にあるノコンギク花畑である。標高は960m、花畑の面積は約500m<sup>2</sup>で、2012年に調査した場所である。(図1・図2)



図1 調査地概要。

### 2012年の結果

2012年10月12日から19日にかけて4回調査を行い、3種60個体のヒョウモンチョウ類の翅にマークした。そのうちの58個体がオオウラギンスジヒョウモンの♀で、花畑に執着しており、マークして放すと一旦は広場から飛び去るが、マーク個体の58%は花畑に戻ってきた。この時期はオオウラギンスジヒョウモンの産卵時期で、ノコンギク群落が種の維持に大きな役割を果たしているようである。またノコンギクはシカの嗜好性植物であることも判明した(2012, 近藤)。

### 2013年の調査結果

#### ①ヒョウモンチョウ類のマーク調査

2013年10月7・10・12・14日の4回、この花畑でヒョウモンチョウ類の翅に油性マジックで、番号をマークした。総数は表1のとおりで、5種76個体のヒョウモンチョウ類をマークしたが、前回同様にオオウラギンスジヒョウモンの♀が55個体と圧倒的に多く、ウラギンヒョウモン9♀、ツマグロヒョウモン4♂3♀、ミドリヒョウモン4♀、クモガタヒョウモン1♀であった。

#### ②再捕獲した個体

マークした76個体のうち37個体(49%)を再捕獲し



図2 調査地詳細。

<sup>1)</sup> Shinichi KONDO 兵庫県朝来市

た。同一日に再捕獲したのが 18 個体 (24%), 2 日以上の間隔をあけて再捕獲したのが 19 個体 (25%) であった。

種別で見るとオオウラギンスジヒョウモンはマークした 55 個体のうち再捕獲したのが 27 個体 (49%) で、同一日に再捕獲したのは 17 個体 (31%), 2 日以上の間隔で再捕獲したのが 10 個体 (18%) であった。

ウラギンヒョウモンは 9 個体にマークして、同一日に再捕獲したのが 1 個体 (11%), 2 日以上の間隔で再捕獲したのが 3 個体 (33%), 再捕獲個体の合計は 4 個体 (44%) であった。

ツマグロヒョウモンは 7 個体マークして 2 日以上の間隔で再捕獲したのが 5 個体 (71%) であった。

ミドリヒョウモンは 4 個体マークし 2 日以上の間隔で再捕獲したのは 1 個体 (25%) であった。

個体別では、No25 ツマグロヒョウモン♀を 10 月 7 日にマークし、10 月 12 日には 5 回も再捕獲し、7 日後の 10 月 14 日にも 2 回再捕獲した。

No14 ツマグロヒョウモン♀・No28 オオウラギンスジヒョウモン♀・No33 ウラギンヒョウモン♀の 3 個体は、10 月 7 日にマークしてから 5 日経過した 10 月 12 日に再捕獲した。

No52 オオウラギンスジヒョウモン♀は 10 月 10 日にマークし、12 日、14 日にも再捕獲した。

## 2012 年との比較

### ①オオウラギンスジヒョウモンの個体数と終息時期

個体数はほぼ同じであったが終息時期は 2013 年は 10 月 14 日で 2012 年の 10 月 19 日と比較すると 5 日早かった。(表 2)

### ②その他のヒョウモンチョウ類

2013 年は 4 種 21 個体を数え、2012 年は 2 種 2 個体であったので種数、個体数ともに増加した。(表 3)

2012 年の調査地では、マークした 60 個体のうち 58 個体がオオウラギンスジヒョウモンであったため当地域ではオオウラギンスジヒョウモンだけが生息し、他のヒョウモンチョウ類は生息している可能性は少ないと判断したが、今回の調査で他のヒョウモンチョウ類の生息の可能性が高くなった。2012 年の調査開始が 10 月 12 日で 15 日以降は他のヒョウモンチョウ類が確認できなかったのに対し、2013 年は 5 日早い 10 月 7 日に開始した。オオウラギンヒョウモン以外のヒョウモンチョウ類は終息時期が早い可能性もある。今後の課題としたい。

## その他のチョウ類

当地で確認したその他のチョウ類 (2012, 2013) は表 4 のとおりである。2012 年に 7 種、2013 年は新たに 4 種確認し、合計 11 種となった。テングチョウが特に多く、アカタテハ、キタテハとともに越冬昆虫の貴重な蜜源になっているようである。

## 新たなノコンギク群落の出現

当調査地から東に約 1200m 離れた高原に通じる道路の脇に約 50m<sup>2</sup> 程度のノコンギク花畑 (黒岩滝広場とよぶ) を見つけた。14 日の調査の行き帰りに 2 回の調査を行った (表 5)。この場所でもオオウラギンスジヒョウモン 2 ♀を確認した。

## 終わりに

2012 年でも指摘したが、多数のヒョウモンチョウ類が確認できたものの、再捕獲の率の高さを考慮すると、この高原一帯で発生したものが、一か所しかない花畑に集中したものと思われる。花畑を離れるとほとんどチョウ類の姿を見ることができない。ヒョウモンチョウ類以外の種は、2 年の 8 回の調査で、わずかに 11 種しか確認できず、またこれらの種は、いずれも関西地域で広域に見られる種である。このことも当地域の多様性がきわめて劣っていることを裏付けている。

## 参考文献

近藤伸一, 2012. ニホンジカ高密度地帯のノコンギク花畑に集中する多数のオオウラギンスジヒョウモン. きべりはむし, 35: (1) 4-10.

表1 個体別マーカー一覧

個体 No.	種名	性別	マーク日時				種別数
			10月 7日	10月 10日	10月 12日	10月 14日	
1	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:08				1
3	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:28 11:59				2
4	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:29	11:28			3
5	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:32				4
6	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:33				5
7	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:35 12:20				6
10	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:40				7
12	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:44				8
13	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:46				9
16	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:49 12:40				10
17	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:50 11:56 12:39				11
18	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:55				12
19	オオウラギンスジヒョウモン	♀	11:58				13
20	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:00				14
21	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:04				15
22	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:05				16
23	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:06 12:15				17
26	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:10				18
28	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:16		12:18 12:20		19
30	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:22				20
31	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:26				21
32	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:30				22
34	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:38				23
36	オオウラギンスジヒョウモン	♀	12:45				24
37	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:01			25
38	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:02	12:32 13:58		26
39	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:05			27
40	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:07 11:38			28
41	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:08 11:29 11:31			29
42	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:08 11:39			30
43	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:10 11:32 11:36			31
44	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:11			32
45	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:13 11:33			33
46	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:14			34
47	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:15			35
48	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:16			36
50	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:19			37
51	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:20			38
52	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:21	12:35	10:45 11:05	39
53	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:23 11:26 11:43			40
54	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:24	13:55		41
55	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:30	13:15 13:28 14:02 14:44		42
58	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:42 11:44	12:58 14:45		43
60	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:48 11:55			44
61	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:50	12:00		45
64	オオウラギンスジヒョウモン	♀		11:59			46
65	オオウラギンスジヒョウモン	♀			12:10 12:15 12:21		47

個体 No.	種名	性別	マーク日時				種別数
			10月 7日	10月 10日	10月 12日	10月 14日	
66	オオウラギンスジヒョウモン	♀			12:16 13:00 13:10 13:57		48
67	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:06		49
68	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:13 13:20		50
69	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:29 13:38 14:48		51
70	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:30 13:38 13:39		52
71	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:31 13:37 14:42	10:47	53
73	オオウラギンスジヒョウモン	♀			13:40	10:50 11:10 11:23	54
74	オオウラギンスジヒョウモン	♀			14:40		55
2	ウラギンヒョウモン	♀	11:26				1
8	ウラギンヒョウモン	♀	11:37				2
9	ウラギンヒョウモン	♀	11:39 12:07				3
24	ウラギンヒョウモン	♀	12:08				4
27	ウラギンヒョウモン	♀	12:12				5
33	ウラギンヒョウモン	♀	12:35 12:46	11:03	13:39		6
57	ウラギンヒョウモン	♀		11:37	12:50		7
62	ウラギンヒョウモン	♀		11:52			8
63	ウラギンヒョウモン	♀		11:54	12:12 12:30 12:39 12:42 13:08 14:48 14:52		9
14	ツマグロヒョウモン	♀	11:46	12:00	14:20		1
25	ツマグロヒョウモン	♀	12:09		12:23 12:45 12:58 13:18 14:50	10:55 11:15	2
49	ツマグロヒョウモン	♀		11:17	12:05 12:26		3
56	ツマグロヒョウモン	♂		11:34 11:40 12:02	13:05 13:12 14:55		4
59	ツマグロヒョウモン	♂		11:46	15:00		5
75	ツマグロヒョウモン	♂			14:44		6
76	ツマグロヒョウモン	♂				10:25	7
11	ミドリヒョウモン	♀	11:42	11:09			1
15	ミドリヒョウモン	♀	11:47				2
29	ミドリヒョウモン	♀	12:18				3
35	ミドリヒョウモン	♀	12:40				4
72	クモガタヒョウモン	♀			13:34		1

調査日時間帯  
 2013年10月7日 11:25 ~ 12:45  
 2013年10月10日 11:00 ~ 12:05  
 2013年10月12日 12:00 ~ 14:05, 14:40 ~ 15:12  
 2013年10月14日 10:25 ~ 11:30

表2 オオウラギンスジヒョウモンのマーク個体数比較

2013年		2012年	
調査日	個体数	調査日	個体数
10月7日	24	10月12日	25
10日	22	15日	23
12日	9	16日	9
14日	0	19日	1
合計	55	合計	58

表3 その他のヒョウモンチョウ類のマーク個体数比較

2013年			2012年		
10月7日	ウラギンヒョウモン ミドリヒョウモン ツマグロヒョウモン	6 ♀ 4 ♀ 2 ♀	10月12日	ミドリヒョウモン クモガタヒョウモン	1 ♀ 1 ♀
10日	ウラギンヒョウモン ツマグロヒョウモン	3 ♀ 2 ♂ 1 ♀	15日		
12日	クモガタヒョウモン ツマグロヒョウモン	1 ♀ 1 ♂	16日		
14日	ツマグロヒョウモン	1 ♂	19日		
合計	ウラギンヒョウモン ミドリヒョウモン クモガタヒョウモン ツマグロヒョウモン	9 ♀ 4 ♀ 1 ♀ 4 ♂ 3 ♀	合計	ミドリヒョウモン クモガタヒョウモン	1 ♀ 1 ♀

表4 その他のチョウ類

	2013年		2012年	
1			モンシロチョウ	1 ♀
2	キタキチョウ	2exs.	キタキチョウ	2exs.
3			ウラナミシジミ	1 ♂
4	ヤマトシジミ	1ex.		
5			ルリシジミ	1 ♂
6	キタテハ	4exs.	キタテハ	1ex.
7	アカタテハ	16exs.	アカタテハ	5exs.
8	ヒメアカタテハ	4exs.		
9	テングチョウ	多数	テングチョウ	多数
10	アサギマダラ	1ex.		
11	イチモンジセセリ	4exs.		
	8種		7種	

表5 黒岩滝広場で確認したチョウ類

キタキチョウ	2exs.
ベニシジミ	2exs.
オオウラギンスジヒョウモン	2 ♀
キタテハ	1ex.
イチモンジセセリ	1ex.

2013年10月14日



写真1 調査地広場全景.



写真2 ノコンギクの花畑 (2013年10月07日).



写真3 吸蜜するオオウラギンスジヒョウモン (2013年10月7日).



写真4 新たなノコンギク群生地, 黒岩滝広場.

## 兵庫県のアトキリゴミムシ類 (2)

森 正人<sup>1)</sup>

### はじめに

前報に引き続き、兵庫県におけるアトキリゴミムシ群 *Truncatipennes* の残りの種について記録を整理しておく。今回は、アトキリゴミムシ亜科 *Lebiinae* の残り、スジバネゴミムシ亜科 *Zuphinae*、ホソゴミムシ亜科 *Dryptinae* およびホソクビゴミムシ科 *Brachinidae* である。記録は文献記録と標本記録に分け、文献記録については記載された記録地名と出典を明記し、地名は原則的に文献記載の地名を転用、重要と思われるものは詳細内容も加えた。標本記録については手許の標本から、原則1産地1例とし、頭数・産地名・データを明記した。筆者以外の採集者は名前を明記し、筆者採集はこれを省略した。上位分類(亜科、族など)については大倉(1985)に概ね準拠し、学名はLöbl・Smetana(2003)に従った。種番号は前報から続けた。

### 各種解説

#### 31. ハネビロアトキリゴミムシ *Lebia (Nipponolebia) duplex* Bates, 1883

【文献記録】篠山町(岸田剛二ほか; 1975), 篠山町雨石山(林靖彦ほか; 1995), 氷上郡(山本義丸; 1958), 氷ノ山(高橋匡; 1982), 神戸市六甲山(八木剛ほか; 2002), 柏原(吉武啓ほか; 2011), 宝塚市玉瀬, 売布ヶ丘(宝塚市; 1993), 宝塚, 神戸市道場, 川西市笹部, 猪名川町上阿古谷, 猪名川町木間生, 波賀町赤西(初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 温泉町扇ノ山, 19-V-1995; 2exs, 波賀町赤西溪谷, 4-V-1987; 3♀, 神戸市淡河, 25-V-2013.

日本では北海道, 本州, 四国, 九州に分布し, 兵庫県内では丘陵地から山地まで広く記録がある。主として広葉樹枝葉上に生息している。次種とよく似ているが, 本種は頭頂部に明瞭な点刻を具え, 前胸背の幅がより広く茶褐色を呈すること, 第4跗節前縁は湾入するだけで明らかな2片状とならない(次種では前縁が深く切れ込んで2片状となる)ことで区別ができる。*Lebia* 属(兵庫県産)では, ♂は中脛節内側の端部付近に1つの切れ込みを具えていることで雌雄の区別ができる。本

種から50番まではアトキリゴミムシ亜科に属する。

#### 32. エゾハネビロアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) fusca* Morawitz, 1863

【文献記録】波賀町赤西(初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 千種町峰越峠, 6-IX-1995; 1ex, 宍粟市赤西溪谷, 9-VII-2011; 2exs, 養父市氷ノ山国際スキー場, 6-VII-2008.

函館原産。北海道, 本州, 四国, 九州に分布, 兵庫県内ではやや山地よりの傾向を示し, 氷ノ山周辺での記録が多い。前種と同様に広葉樹枝葉上に生息しているが個体数はより少ない。

#### 33. アトグロジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) idea* Bates, 1873

【文献記録】氷ノ山(高橋匡; 1982), 神戸市六甲山(八木剛ほか; 2002), 売布ヶ丘(宝塚市; 1993), 神戸市烏原, 甲東園, 川西市笹部(初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 宍粟市赤西溪谷, 5-VII-2009; 1ex, 宍粟市掘, 3-VI-2006; 2exs, 香美町ハチ北高原, 1-VI-2012; 1ex, 御津町揖保川, 7-VII-2003; 1ex, 西宮市すみれ台, 7-V-1994; 1ex, 三原町諭鶴羽山(淡路島), 19-V-2002.

原産地はHigo, Satsuma, Nagasaki。本州, 四国, 九州に分布し, 兵庫県内では平地から山地で記録されている。広葉樹枝葉などに生息しているが, 林床や落葉下で見られることもある。灯火にも飛来する。上翅の斑紋は比較的安定している。

#### 34. ミヤマジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) sylvorum* Bates, 1883

【文献記録】扇ノ山(高橋匡; 1982).

【標本記録】1ex, 宍粟市坂の谷, 4-VII-2010; 56exs, 宍粟市赤西溪谷, 9-VII-2011; 30exs, 宍粟市坂ノ谷, 23-VII-2011; 6exs, 香美町ハチ北高原, 28-VIII-2011.

Higo原産。北海道, 本州, 四国, 九州に分布し, 兵庫県内ではいまのところ, 北中部の山地で記録されている。一般に個体数は少ないが, 氷ノ山周辺では溪流沿い

<sup>1)</sup> Masato MORI 環境科学大阪 株式会社

の大径木樹幹のコケ下などに数多く観察された。灯火に飛来することもある。ミヤマジュウジゴミムシは異名。

35. コジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) iolanthe* Bates, 1883

【文献記録】鉢伏山 (川津智是; 1962).

原産地は Ontake, Subashiri. 本州に分布するが希な種類で, 全国的に記録は少ない。県内では, 文献記録の鉢伏山 (=ハチ高原) のほか波賀町坂の谷で採集された情報もあり, 氷ノ山周辺では確実に生息しているようだが, いまだにめぐり会えない。

36. ジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) retrofasciata* Motschulsky, 1864

【文献記録】氷上郡 (岸田剛二ほか; 1975), 篠山町雨石山 (林靖彦ほか; 1995), 氷ノ山 (高橋匡; 1982), 神河町砥峰高原 (八木剛ほか; 2003), 黒田庄町白山 (兵庫昆; 2001), 宝塚市玉瀬, 売布ヶ丘 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 川西市笹部, 川西市芋生, 川西市大和, 猪名川町内馬場, 猪名川町槻並, 猪名川町木間生, 宝塚市滝ノ平, 神崎郡柄原谷 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 神戸市淡河, 6-V-2006; 3exs, 神戸市道場, 10-VII-2011.

北海道, 本州, 四国, 九州に分布し, 兵庫県内では平地から山地まで広く記録がある。主として広葉樹枝葉上などに生息し個体数も比較的多い。ハムシ幼虫の捕食事例がある。灯火に飛来することもある。上翅の斑紋変異は比較的大きい。ジュウジゴミムシは異名。

37. フタホシアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) bifenestrata* Morawitz, 1862

【文献記録】神河町砥峰高原 (八木剛ほか; 2003), 氷上郡 (山本義丸; 1958), 黒田庄町白山 (兵庫昆; 2001), 神戸市六甲山 (八木剛ほか; 2002), 淡路先山 (堀田久; 1976), 宝塚市玉瀬 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 川西市笹部, 川西市芋生, 川西市東畦野, 西宮市船坂, 篠山町雨石山, 猪名川町木間生, 波賀町赤西, 氷ノ山 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 香住町小原, 10-VII-2001; 2exs, 宍粟市赤西, 14-VI-2009; 1ex, 養父市杉ヶ沢, 1-VI-2012; 3exs, 養父市氷ノ山スキー場, 6-VII-2008; 3exs, 香美町ハチ北高原, 5-V-2012; 1ex, 朝来市生野白口, 23-VII-2007; 2exs, 神河町砥峰高原, 6-VI-2009; 3exs, 神河町峰山高原, 26-V-2012; 2exs, 神戸市道場, 25-V-2013; 3exs, 神戸市藍那, 12-VII-2002; 2exs, 神戸市太山寺, 25-V-2013; 2exs, 姫路市青山, 26-V-2012; 1ex, 洲本市先山 (淡路島), 1-VIII-2009.

シベリア原産で, 日本では北海道, 本州, 四国, 九

州, 南西諸島に分布し, 兵庫県内では平地から山地まで広く見られ個体数も多い。広葉樹枝葉上や花上などに生息している。上翅中央前の淡色斑紋は大きく広がるものから, これが消失し全体が黒色となるものまで変異が大い。フタホシヒメゴミムシ, フタホシヒメアトキリゴミムシは異名。

38. ホシハネビロアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) calycophora* Schmidt-Göbel, 1846

【文献記録】篠山町雨石山 (林靖彦ほか; 1995), 氷上郡 (山本義丸; 1958), 洲本市先山 (堀田久; 1976), 三原郡論鶴羽山ほか (高橋寿郎; 1998), 宝塚市玉瀬, 切畑字長尾山 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 宝塚市, 川西市笹部, 川西市大和, 猪名川町杉生新田, 西宮武庫川, 波賀町音水, 淡路北淡町, 東浦町河内 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】3exs, 神戸市藍那, 12-VII-2002; 1♀, 神戸市淡河, 25-V-2013.

本州, 四国, 九州, 南西諸島に分布し, 兵庫県内では平地から山地まで広く見られ個体数も多い。広葉樹枝葉上や花上などに生息している。ヒノキ樹皮下での越冬事例がある。上翅合部の黒色斑紋は常にあるが, 左右の黒色紋は消失することがある。♂の腹部末端節中央に切れ込みがある。原産地はビルマ。ヒメアトキリゴミムシは異名。

39. キクビアオアトキリゴミムシ *Lachnolebia cribricollis* (Morawitz, 1862)

【文献記録】篠山町 (岸田剛二ほか; 1975), 出石町ほか (高橋匡; 1982), 多可郡中町 (松尾隆人; 2003), 氷上郡 (山本義丸; 1958), 売布ヶ丘 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 甲東園, 神戸市御影, 住吉, 川西市笹部, 川西市大和, 猪名川町, 加古川 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 香美町小代区大谷, 25-VII-2012, 伊藤主計; 2exs, 八鹿町円山川, 24-IX-2011; 3exs, 養父市氷ノ山スキー場, 24-VII-2004; 2exs, 御津町掛保川, 7-VII-2003; 2exs, 小野市加古川, 2-X-2011; 1ex, 稲美町, 10-VI-2012; 1ex, 加西市段下町, 16-X-1999; 3exs, 赤穂市北野千種川, 4-VII-2011; 1ex, 宝塚市玉瀬, 29-X-2011; 7exs, 伊丹市猪名川, 17-XI-201; 3exs, 神戸市藤原台, 4-VII-1987; 1ex, 神戸市道場, 9-IV-2004.

東シベリアが原産で, 日本では北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島に分布する。兵庫県内では平地で見られることが多い。地表性種で河川敷などの石下や落葉下で比較的多く見られ, 冬季は土中や朽ち木中で成虫越冬する。灯火にも飛来する。キクビアオゴミムシは異名。

40. ミズギワアトキリゴミムシ *Demetrius (Demetrius) marginicollis* Bates, 1883

【文献記録】神戸市六甲山 (八木剛ほか; 2002), 神河町砥峰高原 (八木剛ほか; 2003), 猪名川町大野山 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】6exs, 八鹿町円山川, 23-V-2011; 6exs, 香美町ハチ北高原, 21-VIII-2012; 3exs, 豊岡市岩井, 12-X-2011; 1ex, 豊岡市新堂, 18-V-2011; 8exs, 姫路市余部揖保川, 16-X-2011; 1ex, 三田市羽東川, 6-X-2000; 1ex, 宝塚市羽東川, 15-II-2009; 9exs, 宝塚市玉瀬, 29-X-2011; 2exs, 伊丹市猪名川, 17-XI-2011; 2exs, 神戸市道場, 9-VIII-2002; 26exs, 神戸市藍那, 6-X-2011.

北海道, 本州, 九州に分布. 箱根原産. 名前のおり河川や池沼など水辺周辺のヨシなどの植物体に生息し, 普段は葉鞘間に潜んでいる. 生息地での個体数が多いが, ふつう見かける機会は少ない. 灯火にも飛来する.

41. イクビホソアトキリゴミムシ *Dromius (Dromius) quadraticollis* Morawitz, 1862

【文献記録】氷上郡 (岸田剛二ほか; 1975), 氷ノ山 (高橋匡; 1982), 川西市笹部 (仲田元亮, 1978), 有馬, 甲東園, 神戸市垂水, 宝塚, 川西市笹部 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】2exs, 香美町ハチ北高原, 5-V-2011; 23exs, 御津町揖保川 (アキニレ樹皮下), 21-XI-2010; 2♂, 篠山市後川新田 500m, 15-IV-2012; 1ex, 神戸市道場, 18-VII-2002; 1ex, 神戸市本山寺, 4-III-2006.

横浜原産で, 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 各種植物体上に生息する. 越冬は成虫態でケヤキやアキニレ, アカガシなどの樹皮下で比較的多く見られる. *Dromius* 属は県内にも数種が分布しているが, 斑紋などの特徴に乏しく, お互によく似ている. 本種以下の3種は前胸背の側縁中央前と後角付近の2ヶ所に刺毛を具えていることで, ホソアトキリやベーツホソアトキリとは区別ができる. イクビアトキリゴミムシは異名.

42. キタホソアトキリゴミムシ *Dromius (Dromius) nipponicus* Habu, 1983

【標本記録】1♂2♀, 篠山市後川新田 500m, 15-IV-2012.

帯広原産. 北海道, 本州に分布. 比較的希な種で, 兵庫県では初記録と思われる. 篠山市では尾根筋のアカガシ樹皮下で越冬中の個体が確認された. 本種はイクビホソアトキリゴミムシにやや似ているが少し小型で, 肢の色や♂交尾器先端部が広がることで区別が出来る.

43. フトヒゲホソアトキリゴミムシ *Dromius (Dromius) crassipalpis* Bates, 1883

【文献記録】篠山町雨石山 (林靖彦ほか; 1995).

【標本記録】1♂, 篠山市後川新田 500m, 15-IV-2012.

原産地は Oyama in Sagami. 本州に分布. 本種も希な種で, 篠山市では尾根筋のアカガシ樹皮下で前種やイクビホソアトキリゴミムシとともに, 越冬中の個体が確

認された. 本種は *Dromius* 属としては少し変わっていて, 前胸背側縁部の平圧部が少し広がり, 一見ある種のヒラタゴミムシ類のような感じを受ける.

44. ホソアトキリゴミムシ *Dromius (Klepterus) prolixus* Bates, 1883

【文献記録】氷上郡 (岸田剛二ほか; 1975), 氷ノ山 (高橋匡; 1982), 神河町砥峰高原 (八木剛ほか; 2003), 篠ヶ峰 (吉武ほか; 2011), 宝塚市玉瀬 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 雪彦山, 美方町 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】2exs, 香美町ハチ北高原, 28-VII-2011; 2exs, 宍粟市音水溪谷, 19-VIII-2010; 3exs, 養父市氷ノ山スキー場, 6-VII-2008; 1ex, 神河町砥峰, 10-IV-2010; 4exs, 西宮市武庫川, 13-VI-2011; 2exs, 三田市小柿, 30-VII-2005.

原産地は Junsai, Kawachi, Nikko. 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 活動期は各種植物体上に生息し灯火にも飛来する. 越冬態は成虫でケヤキやアキニレ, アカガシなどの樹皮下や隙間に潜る. 個体数が多い. 本種と次種は前胸背後角付近の刺毛を具えるが, 側縁中央前の刺毛を欠く.

45. ベーツホソアトキリゴミムシ *Dromius (Dromius) batesi* Habu, 1958

【文献記録】篠山町雨石山 (林靖彦ほか; 1995), 扇ノ山 (高橋匡; 1982), 神河町砥峰高原 (八木剛ほか; 2003).

【標本記録】1ex, 養父市杉ヶ沢, 1-VI-2012; 1ex, 養父市氷ノ山スキー場, 14-VI-2008; 3exs, 神河町砥峰, 9-VI-2007; 1ex, 川西市一庫, 27-V-2003; 1ex, 三田市香下, 12-V-1996; 1♂, 篠山市後川新田 500m, 15-IV-2012; 3exs, 神戸市藍那, 18-IX-2002; 2exs, 宝塚市大原野, 4-V-2006; 3exs, 西宮市武田尾, 13-VI-2010, 伊藤主計; 2exs, 淡路洲本市 (淡路島), 30-V-2010.

北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 活動期は各種植物体上に生息し, 灯火にも飛来する. 越冬態は成虫でケヤキやアキニレ, アカガシなどの樹皮下や隙間に潜る. 個体数は比較的多い. 前種とは前胸背の形状などが異なる.

46. キイロアトキリゴミムシ *Philorhizus optimus* (Bates, 1873)

【文献記録】栃原 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 神戸市道場, 5-X-1997.

北海道, 本州, 四国, 九州に分布するが希な種類である. 生息環境はよくわからない. 大阪府岬町から材採したエノキ太枝から出てきたことがあり, 成虫で樹木の隙間などに越冬していると考えられる. ケヤキ樹皮下での観察例もある. トガリホソアトキリゴミムシは異名.

47. イマイチビアトキリゴミムシ *Microlestes imaii* Habu, 1972  
 【文献記録】Kobe(Habu; 1983).  
 【標本記録】1ex, 南淡町(淡路島), 12-VIII-1989.  
 原産地は大阪信太山. 本州と九州に分布する. 希な種類で, 生息環境がよくわからない.
48. チビアトキリゴミムシ *Microlestes minutulus* (Goeze, 1777)  
 【文献記録】竹野(高橋匡; 1982).  
 Europe 原産. 北海道と本州に分布する. 北方系の種類で, 私は県内で見たことがない. 画像は北海道産.
49. スジミズアトキリゴミムシ *Apristus grandis* Andrews, 1937  
 【文献記録】篠山町(岸田剛二ほか; 1975), 多可郡中町(松尾隆人; 2003), 洲本市由良, 明石川河口, 西宮市武庫川河口(河上康子ほか; 2000), 宝塚市弥生町(宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和(仲田元亮, 1978), 川西市笹部, 川西市西畦野, 川西市大和, 西宮市甲山, 西宮市御前浜, 西宮市武田尾, 明石市明石川, 波賀町八幡神社, 淡路由良海岸, 南淡町吹上浜(初宿成彦; 2012).  
 【標本記録】5exs, 加古川市加古川, 6-X-2003; 9exs, 神戸市道場, 9-IV-2005; 1ex, 南淡町吹上浜(淡路島), 14-X-2001; 1ex, 三原町論鶴羽山(淡路島), 19-V-2001.  
 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 河川敷の砂地や砂礫地など乾燥した環境で多く見られ, 日中さかんに活動している. 一見, ある種のミズギワゴミムシ類に似ている. 個体数は大変多い.
50. チビミズアトキリゴミムシ *Apristus cuprascens* Bates, 1873  
 【文献記録】西宮市甲子園浜(河上康子ほか; 2000)  
 【標本記録】2exs, 加古川市加古川, 6-X-2003; 2exs, 神戸市道場, 9-IV-2005.  
 Hiogo 原産. 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 前種とともに, 河川敷などの乾燥した環境で見られ, 前種よりもより細かい砂地を好むようである.
51. クビボソゴミムシ *Galerita orientalis* (Schmidt-Göbel, 1846)  
 【文献記録】氷上郡(岸田剛二ほか; 1975), 洲本市安乎町(堀田久; 1959), 宝塚市切畑字長尾山(宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和(仲田元亮, 1978), 甲東園, 川西市笹部, 川西市大和, 猪名川町, 佐用町大撫山, 淡路北淡町, 淡路土生(初宿成彦; 2012).  
 【標本記録】2exs, 豊岡市神鍋, 28-VIII-2011; 1ex, 赤穂市千種川, 4-VII-2011; 2exs, 出石町, 6-VIII-1992; 27exs, 加東市下久米, 25-XI-2012; 2exs, 加西市段下町 20-Jan. 1995; 3exs, 神戸市道場, 14-IX-1987; 1ex, 三原町論鶴羽山(淡路島), 17-VI-2001.  
 原産地は Nagasaki, Yokohama. 本州, 四国, 九州に分布. 水辺や乾燥地, 樹林などいろんな環境で見られ, また個体数も多い. 冬季は乾燥した崖などにもよく入っている. オオクビボソゴミムシ, クビボソゴミムシは異名. 本種と次種はスジバネゴミムシ亜科に属している.
52. フタホシスジバネゴミムシ *Planetes (Planetes) puncticeps puncticeps* Andrews, 1919  
 【文献記録】篠山町(岸田剛二ほか; 1975), 氷上郡(山本義丸; 1958), 洲本市安乎町(堀田久; 1959), 出石町(高橋匡; 1982), 宝塚市玉瀬, 安倉(宝塚市; 1993), 川西市笹部(仲田元亮, 1978), 神戸市垂水, 甲東園, 川西市笹部, 宝塚市清荒神, 淡路町岩屋(初宿成彦; 2012).  
 【標本記録】1ex, 八鹿町円山川, 19-VI-2011; 5exs, 加東市下久米, 25-XI-2012; 3exs, 温泉町塩山, 28-IX-1997; 10exs, 佐用町大撫山, 25-XII-1988; 1ex, 小野市加古川, 2-X-2011; 1ex, 姫路市書写山, 27-IV-1999; 3exs, 神戸市道場, 23-XI-2000; 1ex, 三原町論鶴羽山(淡路島), 30-X-1999.  
 原産地は Nagasaki, Yokohama, Tsushima. 本州, 四国, 九州, 南西諸島に分布. 前種と同じく, いろんな環境に出現する. 冬季はガケなどの土中に越冬し, 乾燥したガケにも入る. フタホシヒラタゴミムシは異名.
53. アオヘリホソゴミムシ *Drypta (Drypta) japonica* Bates, 1873  
 【文献記録】氷上郡(岸田剛二ほか; 1975), 豊岡市(高橋匡; 1982), 宝塚市玉瀬(宝塚市; 1993), 明石 Matsue 海岸, 加古川河口, 赤穂市千種川河口(初宿成彦; 2012).  
 【標本記録】3exs, 八鹿町円山川, 24-IX-2011; 2exs, 赤穂市千種川, 4-VII-2011; 4exs, 三木市美囊川, 2-IV-2000; 67exs, 加古川市上荘町, 4-JAN. 2009; 1ex, 小野市加古川, 2-X-2011; 2exs, 三田市羽束川, 6-X-2000; 3exs, 神戸市道場, 26-VI-1991; 1ex, 神戸市藍那, 10-X-2011.  
 原産地は大阪. 本州, 四国, 九州に分布. 典型的な「河川性種」で水辺周辺のヨシや水生植物体などで多く見られる. ヒメトビウカの幼虫食との情報がある. 冬季は水辺周辺の崖などに越冬し, 時に集団となる. 活動期には灯火にも来する飛来する. 本種はホソゴミムシ亜科に属している.
54. ミイデラゴミムシ *Pheropsophus (Stenaptinus) jessoensis* Morawitz, 1862  
 【文献記録】篠山町(岸田剛二ほか; 1975), 氷上郡(山本義丸; 1958), 洲本市安乎町(高橋寿郎; 1998), 家島本島(上田尚志; 1981), 豊岡市(高橋匡; 1982), 西脇市津万の川原(兵庫匡;

2001), 宝塚市売布ヶ丘, 境野 (宝塚市; 1993), 川西市笹部, 川西市大和, 川西市見野 (仲田元亮, 1978), 甲東園, 川西市笹部, 川西市見野, 川西市大和, 猪名川町上阿古谷, 加古川河口, 佐用町大撫山 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】2exs, 赤穂市千種川, 4-VII-2011; 2exs, 上郡町千種川, 10-V-2003; 2exs, 三木市美囊川, 13-III-1998; 3exs, 小野市権現ダム, 31-V-1992; 1ex, 加古川市上荘町, 3-I-2009; 1ex, 神戸市藤原台, 14-VI-1987; 2exs, 神戸市道場, 16-IV-1993.

原産地は函館. 北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島に分布. 水田周辺草地など水辺環境で多く見られる. 本種の幼虫はケラのトンネル内に侵入して, その卵を摂食することが良く知られている (例えば, 井上; 1966). 灯火にも飛来する. 本種以下はホソクビゴミムシ科に属し, この科の種類は過酸化水素とヒドロキノンを反応させてガスを噴射することで有名である (ヘッピームシ). ミイデラハンメウ, ミイデラコウヤは異名.

55. オオホソクビゴミムシ *Brachinus scotomedes* Redtenbacher, 1867

【文献記録】篠山町 (岸田剛二ほか; 1975), 氷上郡 (山本義丸; 1958), 洲本市先山 (堀田久; 1976, 1959), 家島本島 (上田尚志; 1981), 出石町 (高橋匡; 1982), 宝塚市香合新田 (宝塚市; 1993), 川西市横地, 川西市大和 (仲田元亮, 1978), 川西市笹部, 川西市横地, 川西市大和, 甲東園, 猪名川町内馬場, 南淡町吹上浜 (初宿成彦; 2012)

【標本記録】1ex, 香住町小原, 10-VII-2001; 3exs, 養父市氷ノ山スキー場, 14-VI-2008; 1ex, 八千代町笠形山, 24-VIII-2002; 1ex, 大河内町坂の辻, 26-VII-1999; 3exs, 出石町, 6-VIII-1992; 1ex, 夢前町坪, 3-IX-1997; 2exs, 加東市下久米, 25-XI-2012; 1ex, 洲本市柏原山 (淡路島), 10-X-2004; 1ex, 三原町諭鶴羽山 (淡路), 17-VI-2001; 1ex, 家島本島, 19-VIII-1989.

中国原産. 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 主に樹林環境に生息し, 時に河川敷でも見られる. 個体数は一般に多く, 冬季は乾燥した崖などでも越冬している.

56. コホソクビゴミムシ *Brachinus stenoderus* Bates, 1873

【文献記録】篠山町 (岸田剛二ほか; 1975), 氷上郡 (山本義丸; 1958), 出石町 (高橋匡; 1982), 西宮市武庫川 (吉武啓ほか; 2011), 宝塚市玉瀬 (宝塚市; 1993), 川西市見野 (仲田元亮, 1978), 甲東園, 神戸市押部谷, 猪名川, 宝塚市武田尾, 神崎町笠形山 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】香住町小原, 10-VIII-2001; 18exs, 宍粟市赤西溪谷, 20-IX-1987; 6exs, 宍粟市音水溪谷, 2-V-1994; 3exs, 香美町ハチ北高原, 28-VIII-2011; 2exs, 生野町段ヶ峰, 14-IV-2001; 8exs, 神河町千町峠, 3-V-2008; 1ex, 神河町峰山高原, 27-X-2007; ; 9exs, 神戸市道場, 16-IV-1993.

原産地は Nagasaki, Kawachi. 北海道, 本州, 四国, 九州に分布. 本種は典型的な「河川性種」で, 比較的大きな河川下流部から上流部にかけて広範な水辺の砂礫間に生息する. 個体による大きさや色彩の変異が多く, 上翅の色彩は暗紫から暗青となる. 時に暗緑色となり, アオバネホソクビゴミムシと間違われることがあるが, 本種の方が頭部や前胸背が細く, 上翅隆条がより隆まることなどで区別ができる. なお, 仲田 (1978) が記録したアトマルホソクビゴミムシ *Brachinus chuji* (川西市大和) は, 本種のシノニムとされている.

57. ヒメホソクビゴミムシ *Brachinus incomptus* Bates, 1873

【文献記録】氷上郡 (岸田剛二ほか; 1975), 川西市大和, 川西市見野 (初宿成彦; 2012).

【標本記録】1ex, 加古川市加古川, 4-IV-1993; 1ex, 赤穂市千種川, 9-XII-2000; 1ex, 三木市美囊川, 2-IV-2000; 1ex, 神戸市道場, 13-VI-1992; 1ex, 神戸市藤原台, 13-VII-1987.

原産地は Hiogo, Nagasaki. 本州, 九州に分布するが一般に個体数は少ない. 灯火で得られることがあるが, 生息環境が良く把握できていない. 河川や水辺に依存する種類ではなさそうである. 前種に比べて股が短く, 前胸背がより広い, 上翅色彩も暗褐色で比較的安定していることで区別はしやすい.

58. アオバネホソクビゴミムシ *Brachinus aeneicostis* Bates, 1883

【文献記録】武庫 (初宿成彦; 2012).

原産地は京都小椋池. 北海道, 本州, 四国に分布するが少ない. 沼沢地を好み, 河川周辺で見られることもあるが, *B. stenoderus* のように水辺の砂礫間にいることはない. 冬季には土中で越冬し, 水辺を少し離れた赤土の崖で多くの個体を見たことがある (岡山県院ノ庄). 兵庫県では未見. コホソクビゴミムシにやや似るが, 上翅は常に緑色をおび, 前胸背板の点刻と細毛はより密, 側縁の中央部に目立たない 1 刺毛を具えることで区別ができる.

59. セグロホソクビゴミムシ *Brachinus nigradorsis* Nakane, 1962

【文献記録】扇ノ山 (高橋匡; 1982).

【標本記録】1ex, 波賀町掘, 26-VI-1999.

原産地は Mt. Jonen. 本州, 四国に分布. 山地の溪流附近や源流部などに限って見られる. 溪流付近のガレ場では, 山地性ナガゴミムシやメクラチビゴミムシと混じって掘り出されることがあり, 行動はきわめて素早い.

兵庫県から 59 種のアトキリゴミムシ類等の記録を整

理し報告した。ちなみに、近隣の自治体で発行されている目録での記録種数をみると、大阪府(2000)では44種、京都府(2002)は56種であった。また、同じ中国山地つながりの岡山県(2009)では58種とある。従って、兵庫県のこのグループに関しては、解明が比較的進んでいると評価できる。

今後、新たに記録が出そうな種類としては、ブロンズクビナガゴミムシまたはその近縁種(岡山県で記録がある)、ナガサキクビナガゴミムシ(広島県で記録があり、和歌山県産の標本がある)、ナカグロキバネクビナガゴミムシ(滋賀県で情報がある)、クロズジュウジアトキリゴミムシ(鳥取県大山産の標本が手許にある)、インノシマチビアトキリゴミムシ(瀬戸内海の島で生息の可能性がある)、コルリアトキリゴミムシ(近隣の複数自治体では記録がある)などがあり、多少とも追加が期待できそうである。

県内記録の少ないものとしては、クロモンヒラナガ、ダイミョウアトキリ、ヒメキノコ、キボシアトキリ、アリスアトキリ、コアオアトキリ、フタツメ、クロサヒラアトキリ、コジュウジアトキリ、キタホソアトキリ、フトヒゲホソアトキリ、キイロアトキリ、イマイチビアトキリ、チビアトキリ、アオバネホソクビ、セグロホソクビ(以上、ゴミムシを省略)などで、確認機会があれば追加記録や報告を是非お願いしたい。また、アトキリゴミムシ類には特定のハムシ幼虫やチョウ目幼虫などの狭食性を示すものが知られており、採集時または観察時には食餌や観察された植物種など生態情報の視点にも併せて留意して頂きたい。最後に、県内産の標本を頂いた伊藤主計さんに感謝申し上げる。

#### 参考文献

- Bates, H. W., 1873. On the Geodephagos Coleoptera of Japan. Trans. Ent. Spc. London, PartII, 219-322.
- 河上康子・稲畑憲昭, 2000. 大阪湾沿岸地域における海浜・河口汽水域の地表性甲虫調査. 関西甲虫談話会資料第16号: 29pp.
- 川津智是, 1962. コジュウジアトキリゴミムシの採集記録. 昆虫学評論, 14(2): 34.
- 岸田剛二・辻啓介, 1975. 兵庫県多紀郡篠山町附近の歩行虫. きべりはむし, 4(1/2): 16-25.
- Kirschenhofer, E. 2006. Neue Arten der Gattung Parena Motschulsky aus Japan, China und Indonesien (Sulawesi). Mitt. internat. entomol. Band31, Heft3/4: 87-103.
- 黒沢良彦, 1992. チャドクガの幼虫を補食するゴミムシ. 甲虫ニュース, (100): 23.
- 京都府, 2002. 京都府自然環境目録.
- Habu, A., 1967. Carabidae *Truncatipennes* group (Insecta: Coleoptera). Fauna Japonica.
- Habu, A., 1983. Revised and supplementary notes on and Description of the *Truncatipennes* group of Japan (III). 昆虫学評論, 38(2): 105-146.
- 土生昶申, 1958. ウンカを食べるゴミムシ. KONTYU, 126: 160.
- 土生昶申・貞永仁恵, 1967. オオヨツアナアトキリゴミムシの幼虫の記載ならびに生活史に関する若干の観察. Kontyu, 34(4).
- 林靖彦ほか, 1995. 1989年度、雨石山に於ける甲虫相調査報告書. KASUGA, 11: 3-7.
- 堀繁久, 2008. 森を飛ぶゴミムシと這うゴミムシ. 昆虫と自然, 43(11): 15-19.
- 堀田久, 1959. 淡路島産甲虫類目録(2). 兵庫生物, 3(5)376-378.
- 堀田久, 1976. 先山の昆虫相(1). PARNASSIUS, 16: 11-32.
- 兵庫昆虫同好会事務局, 2001. 多可郡の甲虫相. きべりはむし, 29(1): 10-27.
- 福貴正三, 1935. 大阪附近歩行虫採集案内. 昆虫界, 3(13): 14-18.
- 藤江隼平ほか, 2011. 佐用町昆虫館周辺の昆虫相. きべりはむし, 33(2): 4-20.
- 井上寿, 1966. ミイデラゴミムシの生活史. 昆虫と自然, (9): 18.
- Löbl・Smetana, 2003. Catalogue of Palaearctic Coleoptera. Apollo Books.
- 仲田元亮, 1978. 能勢の昆虫(I).
- 西田光康, 2000. 西日本のクビナガゴミムシ属 *Odacantha* について. 北九州の昆虫, 47(2): 139-140.
- 松尾隆人, 2003. 多可郡中町の自宅灯火で得た甲虫. きべりはむし, 31(1): 48-51.
- 森正人, 1997. アリスアトキリゴミムシの生態に関する一知見. ねじればね, 76: 8-9.
- 森正人, 2006. 不思議の国のアリスアトキリゴミムシ. NUE, 17: 8-10.
- 森正人, 2012. クロモンヒラナガゴミムシ, 兵庫県の記録. きべりはむし, 34(2): 4-6.
- 森正人・古巻進, 2012. アトキリゴミムシ類の生態に関する覚書き. さやばね NS, 6: 38-40.
- 本藤勝, 1984. クワゴマダラヒトリの捕食者オオヨツアナアトキリゴミムシの捕食戦略: 餌密度に対する反応および摂食量と成長量の関係, 日本生態学会誌, (34).
- 岡山県, 2009. 岡山県野生生物目録.
- 大倉正文, 1985. アトキリゴミムシ. 原色日本甲虫図鑑

(II), 保育社: 514pp.

大阪府, 2000. 大阪府野生生物目録.

関公一, 1934. 御影町附近産の甲虫目録. 昆虫界, II(7): 41-43.

新家勝, 1988. 宝塚大橋の甲虫 (その 1). きべりはむし, 16(1): 17-19.

初宿成彦, 2012. 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録 (2). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, (44): 5-170.

高橋匡, 1982. 但馬地方昆虫目録 (予報第 7 報). IRATSUME, 6: 57-76.

高橋寿郎, 1998. 淡路島産甲虫目録 (1). PARNASSIUS, 47: 1-9.

宝塚市, 1993. 宝塚の昆虫 II.

田尾美野留, 1984. 兵庫県におけるクロサヒラタアトキリゴミムシの記録. 月刊むし, (161): 39.

徳平拓朗ほか, 2010. 神戸市北区藍那で採集された貴重な昆虫. きべりはむし, 32(2): 15-17.

豊田浩二, 2000a. アリスアトキリゴミムシとカワラケアリの関連について. 甲虫ニュース (127/128): 11-13.

豊田浩二, 2000b. アリスアトキリゴミムシの生態的知見 (追補). 甲虫ニュース (131): 16-17.

山本義丸, 1958. 兵庫県氷上郡昆虫目録, 氷上の自然第 3 集. 兵庫県立柏原高等学校生物教室.

吉武啓・栗原隆・吉松慎一・中谷至伸・安田耕司, 2011. 研究資料農業環境技術研究所所蔵の土生永申コレクション (昆虫綱: コウチュウ目: オサムシ科) 標本目録. 農業環境技術研究所研究報告, (28).

八木剛ほか, 2002. 六甲山のブナ林とその周辺の昆虫相. きべりはむし, 30(1): 1-45.

八木剛ほか, 2003. 砥峰高原の昆虫相. きべりはむし, 31(1): 1-9.

上田尚志, 1981. 家島群島の昆虫 (2). きべりはむし, 9(1): 9-10.



31. ハネビロアトクリ  
ゴミムシ



32. エゾハネビロアトクリ  
ゴミムシ



33. アトグロジュウジ  
アトクリゴミムシ



34. ミヤマジュウジアトクリ  
ゴミムシ



36. ジュウジアトクリ  
ゴミムシ



37. フタホシアトクリ  
ゴミムシ



38. ホシハネビロアトクリ  
ゴミムシ



39. キオビアオアトクリ  
ゴミムシ



40. ミズギワアトクリ  
ゴミムシ



41. イクビホソアトクリ  
ゴミムシ



42. キタホソアトクリ  
ゴミムシ



43. フトヒゲホソアトクリ  
ゴミムシ



44. ホソアトクリ  
ゴミムシ



45. ベーツホソアトクリ  
ゴミムシ



46. キイロアトクリ  
ゴミムシ



47. イマイチビアトキリ  
ゴミムシ



48. チビアトキリ  
ゴミムシ



49. スジミズアトキリ  
ゴミムシ



50. チビミズアトキリ  
ゴミムシ



51. クビソゴミムシ



52. フタホシスジバネ  
ゴミムシ



53. アオヘリホン  
ゴミムシ



54. ミイデラゴミムシ



55. オオホソクビ  
ゴミムシ



56. コホソクビゴミムシ



57. ヒメホソクビ  
ゴミムシ



58. アオバネホソクビ  
ゴミムシ



59. セグロホソクビ  
ゴミムシ

## 兵庫県産ハバチ・キバチ類の追加記録

吉田浩史<sup>1)</sup>

### はじめに

筆者らは2004年に、兵庫県産のハバチ類相として11科331種の記録を報告した(内藤ら, 2004)。その後約10年が経過し、新たに県内から確認された種や、発行当時見落としていた種等があるので、ここに報告する。

また、内藤ら(2004)以降の文献による新記録種及び分類学的再検討が行われた種についても、ここに記録しておく。ただし、すでに県内から記録のある種の追加記録や、単なる学名の変更等については今回は対象外とした。これらに伴い、現在兵庫県から記録のあるハバチ亜目は360種となった。

標本閲覧の際に便宜を図っていただいた篠原明彦博士(国立科学博物館: NSMT)、松本吏樹郎学芸員(大阪市立自然史博物館: OMNH)、ならびに貴重な標本をご提供いただいた森本健太郎氏、下野誠之氏にお礼申し上げる。

### 内藤ら(2004)の訂正

#### Tenthredinidae ハバチ科

#### Allantinae ハグロハバチ亜科

*Megabeleses crassitarsis* Takeuchi, 1952

#### コブシハバチ

内藤ら(2004)において、本種の分布は「北海道、本州、九州」とされている。北海道の記録はTogashi(1997)からの引用としたが、これはWei(2010)において指摘された通り、*Megatomostethus crassicornis*(ヒゲブトマルハバチ)の記録を本種と誤認したためである。

これは内藤ら(2004)の作成時に本文編集を担当していた吉田のミスであり、ここに訂正しお詫び申し上げる。

なお、ウェブ上では、北海道から本属の幼虫が記録されているが、成虫が未確認のため同定には問題があるとされており、現時点では、本種の確実な記録は本州及び九州のみのものである。

また、上記の通りヒゲブトマルハバチの分布から北海道が欠落している。

#### Tenthredininae ハバチ亜科

*Armitarsus watanabei* Shinohara, 2002

【文献記録】篠山市, 温泉町畑ヶ平(内藤ら, 2004; コシジロトゲアシハバチとして記録)。

内藤ら(2004)におけるコシジロトゲアシハバチ *A. albicinctus* Takeuchi, 1933 の記録は、Shinohara(2002)の見落としによる本種の誤同定に基づくものであり、コシジロトゲアシハバチの兵庫県からの記録は削除する。

### 新記録種等

#### Xyelidae ナギナタハバチ科

*Xyela japonica* Rohwer, 1910

#### ナギナタハバチ

【分布】本州(Blank *et al.*, 2005)。

【標本記録】(西宮市~宝塚市) 阪急電鉄今津線車内, 仁川駅周辺で確認, 1 ♀, 2007. III. 31, 下野誠之。

【備考】電車内で確認されたため、厳密には兵庫県産とすべきか疑問が残る。阪急電鉄今津線は兵庫県内のみを通る路線であり、他府県を通過しないが、ハバチが人や荷物等に付着して電車を「乗り継いだ」可能性も否定できない。

このため、今回は標本記録を挙げるのみとして兵庫県産の種数に含めない。

*Xyela tecta* Blank & Shinohara, 2005 (図1)

【寄主植物】アカマツ / 花粉(Blank *et al.*, 2005)。

【分布】本州, 伊豆大島(Blank *et al.*, 2005)。

【標本記録】三田市有馬富士公園, 250m, 2 ♂, 2007. IV. 7, 吉田浩史。

【備考】Blank *et al.* (2005)により、従来マダラナギナタハバチとされていた種にはきわめて近縁な2種(本種と次種)が含まれていることが報告された。内藤ら(2004)による次種の報告には、その後に記載された本種が混在する可能性がある。

なお、今回示したように両種は混生しており、同時に採集されることも少なくない。

<sup>1)</sup> Hiroshi YOSHIDA 神戸市東灘区

*Xyela variegata* Rohwer, 1910

マダラナギナタハバチ

【寄主植物】アカマツ / 花粉 (Blank *et al.*, 2005).

【分布】本州, 伊豆大島 (Blank *et al.*, 2005).

【標本記録】三田市有馬富士公園, 250m, 6 ♀, 2007. IV. 7, 吉田浩史.

Argidae ミフシハバチ科

*Arge aenea* Hara & Shinohara, 2008

アカガネチュウレンジ

【寄主植物】飼育下ではダケカンバ (Hara & Shinohara, 2008).

【分布】北海道, 本州, 四国, 九州; ロシア極東, 朝鮮半島, 中国 (Hara & Shinohara, 2008).

【文献記録】氷ノ山, 扇ノ山 (Hara & Shinohara, 2008).

【備考】従来ドウガネチュウレンジ *A. metallica* (Klug, 1834) として国内から記録されていた種である。内藤ら (2004) においても同名で2オスが記録されているが, いずれもメスの誤りであった。

Hara & Shinohara (2006) は, *A. metallica* をトゲチュウレンジ属 *Spinarge* に移し, 日本には分布しないとした。

*Arge aruncus* Hara & Shinohara, 2012

コクロチュウレンジ

【寄主植物】ヤマブキショウマ (Hara & Shinohara, 2012).

【分布】北海道, 本州 (Hara & Shinohara, 2012).

【文献記録】畑ヶ平 (Hara & Shinohara, 2012).

上記記録は, 内藤ら (2004) においてウンモンチュウレンジとして記録されたものが含まれる (Hara & Shinohara, 2012).

*Arge enodis* (Linné, 1767)

ヤナギルリチュウレンジ (図 2, 3)

【寄主植物】ヤナギ類 (Shinohara *et al.*, 2007).

【分布】本州; ヨーロッパ, トルコ, コーカサス, シベリア, ロシア極東, 朝鮮半島 (Shinohara *et al.*, 2007).

【文献記録】たつの市揖保中 (Shinohara *et al.*, 2007).

【標本記録】加古川市本町, 加古川河川敷, 8m, 3 ♂, 2008. V. 6, 吉田浩史; たつの市今市, 11 ♂ 4 ♀, 2009. V. 10, 松本吏樹郎 (OMNH); たつの市揖保, 揖保川右岸, 4 ♂, 2009. V. 10, 市川顕彦 (OMNH); たつの市揖保川町野田, 揖保川河川敷, 10m, 9 ♂ 2 ♀, 2011. V. 13, 吉田浩史 (NSMT); たつの市揖保川町新在家, 揖保川河川敷, 15m, 4 ♂, 2012. IV. 29, 吉田浩史 (NSMT).

*Arge indicura* Shinohara & Hara, 2009

シリグロチュウレンジ

【寄主植物】ミツバツチグリ, ワレモコウ (飼育下ではオヘビイチゴ, エゾヘビイチゴ, ヘビイチゴも摂食) (Shinohara & Hara, 2009).

【分布】本州, 四国, 九州 (Shinohara & Hara, 2009).

【標本記録】関宮町杉ヶ沢高原, 大河内町砥峰高原, 南光町るり寺, 佐用町海内, 加美町的場, 市川町小畑, 笠形山? (Shinohara & Hara, 2009).

【備考】従来, *A. nigrovaginata* Malaise, 1931 とされていた種であるが, Shinohara & Hara (2009) により日本産の個体群が別種として新たに記載された。なお, 上記データには内藤ら (2004) においてチュウレンジバチ及びニホンチュウレンジと同一とされていたものが含まれる。

*Arge meliosmae* Shinohara & Hara, 2011

アワブキチュウレンジ

【寄主植物】アワブキ (Shinohara *et al.*, 2011).

【分布】本州 (Shinohara *et al.*, 2011).

【文献記録】宍粟市赤西溪谷 (Shinohara *et al.*, 2011).

*Arge naokoae* Shinohara & Hara, 2013

シモツケチュウレンジ

【寄主植物】イブキシモツケ (飼育下ではコデマリも産卵・摂食) (Shinohara & Hara, 2013a).

【分布】本州, 四国 (Shinohara & Hara, 2013a).

【文献記録】宝塚市武田尾 (Shinohara & Hara, 2013a).

*Arge obesa* Hara & Shinohara, 2012

マルウンモンチュウレンジ

【寄主植物】サワシバ, アカシデ, イヌシデ, アサダ (Hara *et al.*, 2012).

【分布】北海道, 本州, 四国, 九州 (Hara *et al.*, 2012).

【文献記録】佐用町奥海, 篠山市 Kogane (小金岳?)・藤岡 (Hara *et al.*, 2012).

*Arge simillima* (F. Smith, 1874)

【分布】本州; 中国, 東シベリア

【文献記録】Hiogo (Smith, 1874).

【備考】本種の模式産地は「Hiogo」である (Smith, 1874).

ただし, 原記載以降の兵庫県内からの記録はなく, それ以外の国内の記録も, 南アルプスの北沢からの一例のみである。「Hiogo」は現在の神戸市またはその周辺であるが, この記録は Takeuchi (1939) 及び Shinohara & Hara (2007) では疑問視されている。

このため, 本種の記録は保留として兵庫県産の記録に含めない。

*Arge suzukii* (Matsumura, 1912)

ツクバネチュウレンジ

【寄主植物】コツクバネウツギ, ツクバネウツギ, ベニバナノツクバネウツギ (飼育下ではアベリア (ハナツクバネウツギ) も摂食する) (Shinohara & Hara, 2008).

【分布】本州, 四国, 九州 (Shinohara & Hara, 2008).

【文献記録】神戸市六甲, 播磨, 宝塚市武田尾・大原野, 西脇

市西林寺, 篠山市小金岳・浜谷・藤坂, 氷上町三方, 波賀町原, 佐用町若洲 (Shinohara & Hara, 2008).

【備考】従来, *A. abelivora* Okutani, 1956 とされていた種であるが, Shinohara & Hara (2008) により上記種のシノニムとされた。

なお, 上記データには内藤ら (2004) においてウンモンチュウレンジと同定されていたものが含まれる。また, Shinohara & Hara (2008) において挙げられていた篠山市藤岡産の個体は後に別種マルウンモンチュウレンジとされた。

*Spinarge affinis* Hara & Shinohara, 2006

ホソトゲチュウレンジ

【寄主植物】コバノミツバツツジ, トウゴクミツバツツジ (Shinohara & Hara, 2010); シロヤシオ (ゴヨウツツジ), ムラサキヤシオツツジ (Shinohara & Hara, 2013b).

【分布】北海道, 本州, 四国, 九州 (Hara & Shinohara, 2006; Shinohara & Hara, 2013b).

【文献記録】段ヶ峰, 妙見山, 夢前 (Hara & Shinohara, 2006), 加東, 神戸市山田町 (Shinohara & Hara, 2010).

*Spinarge fulvicornis* (Mocsáry, 1909)

ツノキトゲチュウレンジ

【寄主植物】アズキナシ, ナナカマド (Hara & Shinohara, 2006), カマツカ, ズミ (Shinohara & Hara, 2010).

【分布】北海道, 本州, 四国; サハリン, 朝鮮半島, 中国 (Hara & Shinohara, 2006).

【文献記録】畑ヶ平, 妙見山, 大屋町横河溪谷, 雪彦 (Hara & Shinohara, 2006).

【備考】これまでツノキウンモンチュウレンジ *Arge fulvicornis* とされてきた種。ただし, 従来のツノキウンモンチュウレンジの記録には別種が含まれている。現時点での兵庫県内からの確実な記録は上記のとおり。

*Spinarge prunivora* Hara & Shinohara, 2006

サクラトゲチュウレンジ

【寄主植物】オオヤマザクラ, ソメイヨシノ (Hara & Shinohara, 2006).

【分布】北海道, 本州, 九州; 朝鮮半島 (Hara & Shinohara, 2006; Shinohara & Hara, 2013b).

【文献記録】篠山, 神戸市藍那 (Hara & Shinohara, 2006), 吉田 (2002) において神戸市藍那から記録されたツノキウンモンチュウレンジは本種である。

*Spinarge pumila* Hara & Shinohara, 2006

ヒメトゲチュウレンジ

【寄主植物】ホツツジ (Shinohara & Hara, 2011).

【分布】本州 (Hara & Shinohara, 2006).

【文献記録】霧滝, 篠山市小金岳 (Hara & Shinohara, 2006).

Tenthredinidae ハバチ科

Selandriinae シダハバチ亜科

*Nesoselandria ventralis* Takeuchi, 1941

キバラコハバチ

【分布】本州 (Takeuchi, 1941); 中国 (Nie & Wei, 1999).

【文献記録】佐用町船越 (藤江ら, 2011).

*Nipponorhynchus bimaculatus* Naito, 1973

ヒダクチナガハバチ

【寄主植物】イワボタン (中村, 2008).

【分布】本州 (Naito, 1973).

【文献記録】宍粟市音水溪谷, 新温泉町扇ノ山 (兵庫県, 2012).

【備考】環境省の第4次レッドリストにおいて情報不足 (DD) に (環境省, 2012), 兵庫県版レッドデータブック 2012 において C ランク (兵庫県, 2012) に選定されている。

*Nipponorhynchus mirabilis* Takeuchi, 1941

クチナガハバチ

【寄主植物】ネコノメソウ類 (兵庫県, 2012).

【分布】本州 (Takeuchi, 1941), 九州 (Togashi, 1972).

【文献記録】宍粟市赤西溪谷, 新温泉町扇ノ山 (兵庫県, 2012).

【標本記録】扇ノ山, 900m, 3 ♂ 1 ♀, 2007. V. 8, 内藤親彦 (NSMT).

【備考】環境省の第4次レッドリストにおいて情報不足 (DD) に (環境省, 2012), 兵庫県版レッドデータブック 2012 において C ランク (兵庫県, 2012) に選定されている。

*Strongylogaster takeuchii* Naito, 1980

タケウチナガシダハバチ

【分布】本州 (Naito, 1980); 中国 (Nie & Wei, 1999).

【標本記録】佐用町本郷, 200m, 1 ♀, 2007. IV. 29, 内藤親彦 (NSMT).

*Strongylogaster xanthocera* (Stephens, 1835)

ツノキナガワラビハバチ

【寄主植物】ワラビ (Naito, 1996).

【分布】北海道, 本州, 四国; 中国, シベリア, ヨーロッパ (Naito, 1996).

【標本記録】笠形山, 400m, 2 ♂ 2 ♀, 2008. V. 1, 内藤親彦 (NSMT); 揖保郡太子, 100m, 1 ♀, 2009. IV. 16, 内藤親彦 (NSMT).

【備考】国内からは Naito (1996) により初めて記録された。国内の分布記録は, 国立科学博物館の標本・資料統合データベースによる記録を含む。

### Nematinae ヒゲナガハバチ亜科

#### *Pristiphora punctifrons* (Thomson, 1871)

【分布】本州; 東シベリア, 中央アジア, モンゴル, コーカサス, ヨーロッパ (Haris, 2006; Haris & Zsolnai, 2007).

【文献記録】氷ノ山 (Haris & Zsolnai, 2007).

Haris & Zsolnai (2007) では, 分布記録が “Hyonozen Sajima” と記されているが, “Hyonoson, Tajima” の誤りである.

#### *Pristiphora shinoharai* Haris & Zsolnai, 2007

【分布】本州.

原記載 (Haris & Zsolnai, 2007) では, 模式産地は Kyushu, “Sarayama, Jamba” と記されているが, “Sasayama, Tamba” の誤りで, 分布域は本州である.

【文献記録】篠山 (Haris & Zsolnai, 2007).

### Allantinae ハグロハバチ亜科

#### *Allantus rhododendri* Togashi, 2003

ツツジセグロハバチ (図 4)

【寄主植物】コバノミツバツツジ (Togashi, 2003).

【分布】本州 (Togashi, 2003).

【標本記録】神戸市北区道場町生野, 150m, 1 ♀, 2012. V. 14, 吉田浩史.

#### *Empria honshuana* Prous & Heidemaa, 2011 (図 5, 6)

【分布】本州 (Prous *et al.*, 2011).

原記載では, 東京・栃木・埼玉・千葉の各都県から記録されている (Prous *et al.*, 2011).

【標本記録】神戸市北区山田町藍那, 250m, 1 ♂, 2000. IV. 9, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 2000. IV. 30, 吉田浩史; 神戸市中央区再度山, 1 ♂, 2000. IV. 22, 吉田浩史.

【備考】日本産マドハバチ属 *Empria* は, Prous *et al.* (2011) により再検討結果が報告された. 後述の分類資料等を参照.

内藤ら (2004) により次種マドハバチとして報告された種の中には, 別種が混在している可能性がある. 今回は筆者が同定したものを記録しておく.

#### *Empria quadrimaculata* Takeuchi, 1952

マドハバチ (図 7, 8)

【分布】本州, 四国, 九州 (Prous *et al.*, 2011).

【標本記録】神戸市中央区再度山, 400m, 2 ♂, 2000. IV. 22, 吉田浩史; 神戸市中央区再度東谷, 350m, 1 ♀, 2001. IV. 14, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 2002. IV. 14, 吉田浩史; 神戸市兵庫区鳥原町, 100m, 1 ♀, 2012. IV. 28, 吉田浩史; 神戸市北区山田町藍那, 250m, 1 ♀, 1997. IV. 26, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 1997. V. 4, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 1999. V. 1, 吉田浩史; 同, 3 ♂, 2000. IV. 23, 吉田浩史; 同, 1 ♂ 1 ♀, 2000. IV. 30, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 2000. V. 4, 吉田浩史; 同, 1 ♀, 2004. IV. 10, 吉田浩史.

#### *Empria takeuchii* Prous & Heidemaa, 2011

【分布】北海道, 本州 (Prous *et al.*, 2011).

原記載では, 北海道・東京・山梨・栃木・長野・石川・京都・大阪・鳥取の各都道府県から記録されている (Prous *et al.*, 2011).

【標本記録】神戸市北区道場町, 1 ♀, 2012. V. 18, 吉田浩史 (NSMT).

#### *Eriocampa babai* Togashi, 1980

【寄主植物】ヤブデマリ (Togashi & Nagase, 1992).

【分布】本州 (Togashi, 1980).

【文献記録】畑ヶ平 (Togashi, 1980).

【備考】内藤ら (2004) の作成時に文献記録を見落としていたので追記しておく.

#### *Eriocampa kurumivora* Togashi, 1980

クルミマルハバチ (図 9)

【寄主植物】オニグルミ (Togashi, 1980).

【分布】本州 (Togashi, 1980).

【標本記録】たつの市揖保中, 揖保川河川敷, 10m, 2 ♂, 2007. V. 3, 吉田浩史; たつの市今市, 揖保川河川敷, 10m, 1 ♂, 2007. V. 3, 吉田浩史.

### Tenthredininae ハバチ亜科

#### *Corymbas chujoi* Togashi, 1972

チュウジョウコシジロハバチ (図 10)

【分布】本州 (富樫, 1983), 九州 (Togashi, 1972).

【文献記録】神戸市北区藍那 (吉田, 2002; *Corymbas* sp. とし て記録).

#### *Pachyprotasis youngiae* Inomata & Naito, 2006

オニタビラコキモンハバチ

【寄主植物】オニタビラコ / 瘦果 (Naito & Inomata, 2006).

【分布】本州, 九州; 朝鮮半島 (Naito & Inomata, 2006).

【文献記録】上山高原, 神戸市六甲山, 西脇, 塚塚, 篠山 (Naito & Inomata, 2006), 神戸市北区藍那 (吉田, 2002; *Pachyprotasis* sp. 2 とし て記録).

#### *Siobla apicalis* Takeuchi, 1929

ツマジロコシアカハバチ (図 11, 12)

【分布】本州, 四国, 九州; 朝鮮半島 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では青森, 岩手, 福島, 群馬, 埼玉, 東京, 神奈川, 新潟, 山梨, 静岡, 長野, 岐阜, 石川, 滋賀, 奈良, 兵庫, 鳥取の各都県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013) 他, 筆者は岡山, 山口産の標本を検した (未発表).

【文献記録】ハチ高原, 扇ノ山, 氷ノ山, 畑ヶ平 (Shinohara *et al.*, 2013).

【備考】日本産コシアカハバチ属 *Siobla* は, Shinohara *et al.* (2013) により再検討結果が報告された. 後述の分類資料等を

参照.

*Siobla ferox* (F. Smith, 1874)

オオコシアカハバチ (図 13)

【分布】北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬; 中国, 朝鮮半島 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では岩手, 福島, 新潟, 群馬, 栃木, 埼玉, 東京, 神奈川, 山梨, 長野, 岐阜, 静岡, 石川, 福井, 滋賀, 三重, 京都, 奈良, 和歌山, 大阪, 兵庫, 岡山, 鳥取, 島根, 山口の各都府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013).

【文献記録】神戸市有馬, 波賀町赤西溪谷, 妙見山, 篠山, 柏原, 雪彦, 畑ヶ平, 氷ノ山 (Shinohara *et al.*, 2013), 神戸市北区藍那 (吉田, 2002; *Siobla* sp. として記録).

【標本記録】神戸市灘区六甲山, 700m, 2 ♀, 2011. VI. 3, 吉田浩史 (NSMT); 同, 1 ♂, 2012. V. 19, 吉田浩史 (NSMT); 同, 5 ♂, 2013. V. 24, 吉田浩史 (NSMT); 同, 1 ♀, 2013. VI. 7, 吉田浩史 (NSMT); 神戸市北区山田町藍那, 250m, 1 ♀, 2013. VI. 7, 吉田浩史 (NSMT); 西宮市武田尾, 武庫川, 1 ♂, 2001. V. 13, 河上康子 (OMNH); 美方郡美方町備~高丸山, 950m, 1 ♀, 2002. V. 25, 桂孝次郎 (OMNH); 美方郡香美町鉢伏山, 980m, 2 ♂, 2012. VI. 10, 吉田浩史 (NSMT); 同, 5 ♂, 2012. VI. 23, 吉田浩史 (NSMT); 養父郡大屋町氷ノ山南麓, 1250-1350m, 1 ♂, 1999. VI. 13, 春沢圭太郎 (OMNH).

*Siobla hirasana* Takeuchi, 1929 (図 14, 15)

【分布】本州, 四国, 九州 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では青森, 岩手, 山形, 福島, 新潟, 栃木, 群馬, 茨城, 東京, 神奈川, 山梨, 静岡, 長野, 岐阜, 石川, 三重, 滋賀, 京都, 和歌山, 奈良, 大阪, 兵庫, 鳥取, 広島, 島根の各都府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013).

【文献記録】妙見 (但馬), Takinoyu (建屋?), 関宮 (Shinohara *et al.*, 2013).

【標本記録】美方郡香美町鉢伏山, 980m, 1 ♂, 2011. VII. 6, 吉田浩史.

*Siobla japonica* Shinohara, Wei & Niu, 2013 (図 16)

【分布】本州 (Shinohara *et al.*, 2013).

青森, 秋田, 宮城, 福島, 群馬, 埼玉, 東京, 神奈川, 山梨, 静岡, 新潟, 長野, 岐阜, 石川, 福井, 奈良, 兵庫, 鳥取の各都府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013) 他, 筆者は岡山産を検した (未発表).

【文献記録】音水溪谷 (Shinohara *et al.*, 2013).

【備考】記録を見る限り本州東部では普通にみられるようであるが, 近畿・中国地方では少ない.

*Siobla metallica* Takeuchi, 1929

ルリコシアカハバチ (図 17)

【分布】本州, 四国 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では岩手, 栃木, 群馬, 埼玉, 東京, 金沢, 山梨, 新潟, 長野, 岐阜, 石川, 滋賀, 兵庫の各都府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013) 他, 岡山県版レッドデータブック 2009 では準絶滅危惧に選定されており (岡山県, 2010), また筆者は鳥取産を検している (未発表).

【文献記録】音水 (Shinohara *et al.*, 2013), 波賀町赤西溪谷・坂ノ谷林道, 温泉町, 関宮町氷ノ山 (内藤ら, 2004).

【備考】環境省の第4次レッドリストにおいて情報不足 (DD) に選定されている (環境省, 2012). ただし, 場所によりまとまった個体がみられることがある.

*Siobla pulchra* Shinohara, Wei & Niu, 2013 (図 18)

【分布】北海道, 本州 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では栃木, 長野, 兵庫の各県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013) 他, 山口から *Siobla* sp.1 として記録されている (田中・田中, 2007).

【文献記録】温泉町扇ノ山, 波賀町原 (赤西) (Shinohara *et al.*, 2013).

*Siobla sturmii* (Klug, 1818)

コシアカハバチ

【分布】北海道, 本州, 九州; 朝鮮半島, 千島, サハリン, シベリア, ロシア極東, ヨーロッパ (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では岩手, 宮城, 栃木, 群馬, 山梨, 長野, 京都, 兵庫の各府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013).

【文献記録】畑ヶ平, 氷ノ山, 音水, 赤西, 波賀町堀 (Shinohara *et al.*, 2013).

【標本記録】美方郡香美町鉢伏山, 980m, 1 ♂ 1 ♀, 2012. VI. 23, 吉田浩史 (NSMT).

*Siobla takeuchii* Shinohara, Wei & Niu, 2013 (図 19)

【分布】北海道, 本州, 九州 (Shinohara *et al.*, 2013).

本州では岩手, 福島, 新潟, 群馬, 栃木, 埼玉, 東京, 神奈川, 山梨, 静岡, 長野, 岐阜, 石川, 福井, 三重, 滋賀, 京都, 和歌山, 奈良, 兵庫の各都府県から記録がある (Shinohara *et al.*, 2013).

【文献記録】氷ノ山, 畑ヶ平, 扇ノ山, 音水, 赤西 (Shinohara *et al.*, 2013).

【標本記録】美方郡香美町鉢伏山, 980m, 1 ♂, 2012. VI. 23, 吉田浩史 (NSMT).

Siricidae キバチ科

*Eriotremex yamasakii* Togashi, 1990

ニセタイワンヒラアシキバチ

【分布】本州 (Togashi, 1990).

【標本記録】三田市有馬富士, 1 ♀, 2004. VII. 25, 森本健太郎 (OMNH).

*Tremex contractus* Maa, 1949

カタマルヒラアシキバチ

【寄主植物】コナラ (中浜ら, 2006).

【分布】本州, 四国; 中国, 朝鮮半島 (Maa, 1949; 竹内, 1955; Lee *et al.*, 1998; 岡山県, 2003).

【文献記録】三田市虚空蔵山, 篠山市小金ヶ嶽 (中浜ら, 2006).

#### Xiphydriidae クビナガキバチ科

*Platyxiphydria miyakei* Togashi, 1963

ミヤケヒラタクビナガキバチ (図 20)

【寄主植物】ホオノキ (山田, 2000).

【分布】本州, 四国, 九州 (Togashi, 1963; 1974).

【標本記録】波賀町赤西溪谷, 1 ♀, 2001. VI. 10, 松本史樹郎 (OMNH).

#### 分類資料等

近年国内産の種について分類学的再検討が行われた, ハバチ科ハグロハバチ亜科のマドハバチ属 *Empria* 及びハバチ亜科のコシアカハバチ属 *Siobla* について, 以下の通り分類資料を作成した. なお, 両属ともその外見から属の同定は比較的容易であるが, 属までの検索が必要な場合には吉田 (2006), 内藤・吉田 (2006; 2013) 等をご参照頂きたい.

#### 1. マドハバチ属 *Empria*

ハバチ科ハグロハバチ亜科に属する小型のハバチ類で, 黒色の腹部に独特の光沢のある 2 列の淡色紋を持つことが特徴である.

日本産本属については, 2 種の既知種と約 7 種の未同定種があるとされていた (Takeuchi, 1952; 阿部・富樫, 1989) が, その後長い間検討されていなかった.

2011 年に Prous, Heidemaa, Shinohara & Soon により再検討結果が報告され, 11 種に整理された. このうち本州から記録のある 5 種についての検索表を以下に示した (Prous *et al.*, 2011 の検索表を参考に再構成を行った).

また, 従来本属とされていたウスキアシハバチは別属に移され, 学名は *Monsoma pallipes* (Matsumura, 1912) とされた.

なお, 北海道からは本属が 9 種と前出のウスキアシハバチが記録されている. 四国と九州からは現時点ではマドハバチ 1 種が記録されるのみであるが, 今後追加される可能性がある.

#### ■本州産マドハバチ属 *Empria* の検索

1a. メス → 2

1b. オス → 6

2a. 腹部の斑紋は 5 - 6 対で大きい

マーラースペースは広く, 後単眼直径の 2 倍を超える. 足の爪は二叉する. 頭盾には通常淡色部があるが, 全体黒色の個体もいる. 肩板は淡色. 本州では山形から記録があるのみ

→ *E. plana* (Jakowlew, 1891)

2b. 腹部の斑紋は 2 - 4 対, 個体により後方の斑紋が小さくなる → 3

3a. 脚の転節は黒色 → 4

3b. 脚の転節は淡色 → 5

4a. 後単眼区は, 通常横幅が長さの 2.1 - 2.5 倍 (まれに 1.9 倍). 腹部の斑紋は通常第 2・3 節の 2 対, 個体により第 4 節に 3 対目があるが, 前 2 対に比べ小さい. 後脛節は前半の淡色部が後半の黒色部より長い

→ *E. quadrimaculata* Takeuchi, 1952

4b. 後単眼区は, 横幅が長さの 1.5 - 2.1 倍. 腹部の斑紋は 3 対または 4 対. 後脛節は前半の淡色部が後半の黒色部より短い

→ *E. honshuana* Prous & Heidemaa, 2011

5a. 触角鞭節は, 頭幅の 2 倍以下の長さ. 腹部の斑紋は第 2 - 5 節の 4 対で比較的大きい

→ *E. takeuchii* Prous & Heidemaa, 2011

5b. 触角鞭節は, 頭幅の 2 倍より明らかに長い. 腹部の斑紋は第 2 - 4 節の 3 対で, すべて小さい

→ *E. tridentis* Lee & Ryu, 1996

6a. 後単眼区は, 横幅が長さの 2.2 - 2.5 倍 (まれに 2.1 倍). 後転節は黒色.

→ *E. quadrimaculata* Takeuchi, 1952

6b. 上記の両方を満たさない → 7

7a. マーラースペースは後単眼直径の 1.9 倍以上

→ *E. plana* (Jakowlew, 1891)

7b. マーラースペースは後単眼直径の 1.8 倍以下 → 8

8a. 脚の転節は黒色

→ *E. honshuana* Prous & Heidemaa, 2011

8b. 脚の転節は淡色 → 9

9a. 後単眼区は, 横幅が長さの 2.0 - 2.7 倍. 触角鞭節は, 頭幅の 2.2 - 2.7 倍. 次種との区別は交尾器の形状によるものが確実である (詳細は Prous *et al.* (2011) を参照)

→ *E. takeuchii* Prous & Heidemaa, 2011

9b. 後単眼区は, 横幅が長さの 1.9 - 2.4 倍. 触角鞭節は, 頭幅の 2.6 - 3.7 倍

→ *E. tridentis* Lee & Ryu, 1996

2. コシアカハバチ属 *Siobla*

ハバチ科ハバチ亜科に属する大～中型のハバチ類である。多くの種ではコシアカハバチの名のとおり、腹部前半に橙黄色の幅広い横帯を持つが、体の大半がルリ色や黒色の種、また日本からは記録されていないが大半が黄褐色の種もある。一部の種では雌雄の色彩が大きく異なり、また個体変異も種により大きく、同定が困難な場合もある。

日本産本属については、Shinohara *et al.* (2013) において再検討結果が報告され、3 新種を含む 9 種に整理された。

なお、筆者は吉田 (2006) において本属の検索表を作成したが、検討が不十分であったため、これに従うと一部の種は別種と同定される。訂正を兼ねて以下の通り検索表を作成した (Shinohara *et al.*, 2013 の検索表を参考に再構成を行った)。

■日本産コシアカハバチ属 *Siobla* の検索

1a. ほぼ全身がルリ色で強い光沢がある (図 17)

→ *S. metallica* Takeuchi, 1929

ルリコシアカハバチ

1b. 体色は主に黒色と橙黄色～黄褐色で、ルリ色とはならない → 2

2a. 触角の先端の数節は白色、まれに全体黒色。メスの腹部に橙黄色の部分はない (図 11)。オスメスで腹部の色彩が大きく異なり、メスは一見するとコシジロハバチ属 *Corymbas* の種に似る。

→ *S. apicalis* Takeuchi, 1929

ツマジロコシアカハバチ

2b. 触角の色彩は黒色または黄褐色からなり、白色部はない → 3

3a. 小盾板は黄褐色。個体により黄褐色部が狭くなる → 4

3b. 小盾板は黒色 → 6

4a. 前翅の先端部は明瞭に暗色となる。後脛節の黒色部は小さい。腹部腹面側は大半黄褐色 (図 18)

→ *S. pulchra* Shinohara, Wei & Niu, 2013

4b. 前翅はほぼ一様に透明で黄色味を帯びる (図 13, 14)。後脛節前半は黒色。腹部腹面側の黒色部は背面側とほぼ同様 → 5

5a. 肩板, Mesoscutellar appendage (小盾板後方の逆三角形の部分), 腹部第 1 背板 (個体により一部黒色), 前・中転節は黄褐色 (図 13)

→ *S. ferox* (F. Smith, 1874)

オオコシアカハバチ

5b. 肩板 (個体により一部黄褐色), Mesoscutellar appendage, 腹部第 1 背板, 前・中転節は黒色 (図 14)

→ *S. hirasana* Takeuchi, 1929

6a. 触角の少なくとも前半は黒色 → 7

6b. 触角の少なくとも前半は黄褐色 → 9

7a. 触角は全体黒色。メスでは個体により鞭節基部 2 節までに狭い褐色部を持つことがある。後脚の基節・転節・腿節は全体黒色。色彩変異が大きく、腹部の黄褐色帯が消失することがある。小型種で、体長はメスでは 9.5 ~ 12.0mm, オスでは 7.5 ~ 11mm。ほぼ全体が黒化した個体 (図 15) は、一見クロハバチ属 *Macrophya* の種に似る

→ *S. japonica* Shinohara, Wei & Niu, 2013

7b. 触角は通常基部側が黄褐色。後脚の転節・腿節に黄褐色～黄白色の部分がある。腹部前半に黄褐色の横帯を持つ。やや大型で、体長はメスでは 11.0 ~ 15.5mm, オスでは 9.5 ~ 14.0mm → 8

8a. オスのみ (メスは検索表 5b を参照)。後転節は黄白色、まれに一部が暗色を帯びる。通常は小盾板に黄褐色部を持つが、オスではまれに黄褐色部が消失することが確認されている

→ *S. hirasana* Takeuchi, 1929 (オスの一部)

8b. 後転節は黒色～暗褐色

→ *S. takeuchii* Shinohara, Wei & Niu, 2013

9a. 後脛節は全体黒色。メスの触角は基部側に黒色部がある。産卵管鞘は中脛節とほぼ同長。オスの東部の毛は黒色で直線状

→ *S. jucunda* (Mocsáry, 1909)

9b. 後脛節に黄褐色部がある。メスの触角は通常黒色部を持たない。産卵管鞘は中脛節より短い。オスの頭部の毛は褐色で、先端部はやや曲がる

→ *S. sturmii* (Klug, 1818)

参考文献

- 阿部正喜・富樫一次, 1989. ハバチ亜目. 平嶋義宏 (監修), 日本産昆虫総目録 II. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共同編集: 541-560.
- Blank, S. M., Shinohara, A. & Byun, B.-K., 2005. The East Asian *Xyela* species (Hymenoptera: Xyelidae) associated with Japanese red pine (*Pinus densiflora*; Pinaceae) and their distribution history. *Insect Systematics & Evolution*, 36(3): 259-278.
- 藤江隼平・吉田浩史・安達誠文・吉田貴大・旭和也・藤原淳一・安岡拓郎, 2011. 佐用町昆虫館周辺の昆虫相 - マレーゼトラップで得られた甲虫目, 膜翅目, 双翅目およびライトトラップで得られた鱗翅目の昆虫について -, きべりはむし, 33(2): 4-20.
- Hara, H. & Shinohara, A., 2006. The sawfly genus *Spinarge* (Hymenoptera, Argidae). *Bull. Natn. Sci.*

- Mus., Tokyo, Series A, 32(2): 61-94.
- Hara, H. & Shinohara, A., 2008. The species-group of *Arge aenea* (Insecta, Hymenoptera, Argidae). Bull. Natn. Sci. Mus., Series A, 34(2): 77-94.
- Hara, H. & Shinohara, A., 2012. *Arge aruncus* n. sp. (Hymenoptera, Argidae) feeding on *Aruncus dioicus* in Japan. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, 38(2): 75-87.
- Hara, H., Shinohara, A. & Ibuki, S., 2012. *Arge obesa* n. sp. (Hymenoptera, Argidae) feeding on *Carpinus* and *Ostrya* in Japan, with taxonomic notes on *Hylotoma japonica*. Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, 38(3): 125-143.
- Haris, A., 2006. Study on the Palaearctic *Pristiphora* species (Hymenoptera: Tenthredinidae). Natura Somogyiensis, 9: 201-277.
- Haris, A. & Zsolnai, B., 2007. New Nematinae species (Hymenoptera: Symphyta, Tenthredinidae) from Japan and Korea. Zoologische Mededelingen, 81(7): 137-147.
- 兵庫県, 2012. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2012(昆虫類). 72pp. 編集 / 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課, 発行 / 財団法人ひょうご環境創造協会.
- 環境省, 2012. 第4次レッドリストの公表について. (<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=15619>)
- Lee, J.-W., Ryu, S.-M. & Chung, D.-K., 1998. Taxonomy of the genus *Tremex* Jurine (Hymenoptera: Siricidae) from Korea, with descriptions of one new species and one unrecorded species. Korean J. Biol. Sci., 2: 297-302.
- Maa, T., 1949. A synopsis of Asiatic Siricoidea with notes on certain exotic and fossil forms. Notes D'Entomologie Chinoise, 13(2): 11-189.
- Naito, T., 1973. A new species of *Nipponorhynchus* Takeuchi from Japan (Hymenoptera, Tenthredinidae). Kontyu, 41(1): 95-96.
- Naito, T., 1980. Studies on the Japanese sawflies of the genus *Strongylogaster* Dahlbom. Kontyu, 48(3): 390-401.
- Naito, T., 1996. Phylogeny of the fern associated sawfly genus *Strongylogaster* Dahlbom (Hymenoptera: Tenthredinidae). Memoirs of the Entomological Society of Washington, 17: 161-178.
- Naito, T. & Inomata, R., 2006. A new triploid thelytokous species of the genus *Pachyprotasis* Hartig, 1837 (Hymenoptera: Tenthredinidae) from Japan and Korea. In: Blank, S. M., Schmidt, S. & Taeger, A. (eds), Recent Sawfly Research, Synthesis and Prospects: 279-283. Goecke & Evers, Keltern.
- 内藤親彦・吉田浩史, 2006. ハバチ・キバチ類(ハチ目広腰亜目)の絵解き検索. 日本環境動物昆虫学会 第16回講演会テキスト, 環境アセスメント動物調査手法, 16: 1-23.
- 内藤親彦・吉田浩史, 2013. ハバチ・キバチ類(ハチ目広腰亜目)の絵解き検索. 日本環境動物昆虫学会 編, 初宿成彦 監修, 絵解きで調べる昆虫 ~ 環境アセスメント動物調査手法講演会 絵解き検索シリーズ総集編~, 79-101. (注: 上記の内藤・吉田(2006)に訂正を加えたのみで, 内容はほぼ同じ)
- 内藤親彦・吉田浩史・中峰空・森田年則・池田隆直・鈴木壽也・中西明德, 2004. 兵庫県におけるハバチ類の種多様性. 兵庫県立人と自然の博物館 自然環境モノグラフ, (1): 10pl + 85pp.
- 中浜直之・辻秀幸・森本健太郎・松本吏樹郎, 2006. カタマルヒラアシキバチの大阪および兵庫における記録と生態的知見. Nature Study, 52(12): 5-6.
- 中村和夫, 2008. シダハバチ亜科希少種の分布と生態. 昆虫と自然, 43(3): 24-29.
- Nie, H. & Wei, M., 1999. New Records of Species in Tenthredinoidea (Hymenoptera) to China. Entomotaxonomia, 21(2): 143-145.
- 岡山県, 2003. 岡山県野生生物目録. 397pp.
- 岡山県, 2010. 岡山県版レッドデータブック 2009 絶滅の恐れのある野生生物 - 動物編 -. 417pp. 岡山県生活環境部自然環境課, 岡山.
- Prous, M., Heidema, M., Shinohara, A. & Soon, V., 2011. Review of the sawfly genus *Empria* (Hymenoptera, Tenthredinidae) in Japan. Zookeys, 150: 347-380.
- Shinohara, A., 2002. *Armitarsus watanabei*, a new sawfly (Hymenoptera, Tenthredinidae) from central Honshu, Japan. Spec. Bull. Jap. Soc. Coleopterol., (5): 473-479.
- Shinohara, A. & Hara, H., 2008. Taxonomy, distribution and life history of *Abelia*-feeding sawfly, *Arge suzukii* (Hymenoptera, Argidae). Jpn. J. syst. Ent., 14(1): 29-47.
- Shinohara, A. & Hara, H., 2009. *Arge indicula* n. sp. feeding on *Potentilla* and *Sanguisorba* (Insecta, Hymenoptera, Argidae) from Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Series A, 35(1): 55-71.
- Shinohara, A. and H. Hara 2010. Host plants, larvae and life history of *Spinarge affinis* and *S. fulvicornis* (Hymenoptera, Argidae) in Japan. Jpn. J. syst. Ent., 16(1): 47-62.

- Shinohara, A. & Hara, H., 2011. Host plant, larva and life history of *Spinarge pumila* (Hymenoptera, Argidae) in Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A*, 37(4): 203-208.
- Shinohara, A. & Hara, H., 2013a. *Arge naokoae* n. sp. (Hymenoptera, Argidae) feeding on *Spiraea dasyantha* in Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A*, 39(1): 21-38.
- Shinohara, A. & Hara, H., 2013b. New distribution and host records for *Spinarge prunivora* and *S. affinis* (Hymenoptera, Argidae) from Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 19(1): 101-106.
- Shinohara, A., Ibuki, S. & Hara, H., 2011. *Arge meliosmae* n. sp. (Hymenoptera, Argidae) feeding on *Meliosma myriantha* in Japan. *Bull. Natl. Mus. Nat. Sci., Ser. A*, 37(2): 99-112.
- Shinohara, A., Yoshida, H. & Hara, H., 2007. Distribution records of willow-feeding sawfly, *Arge enodis* (Insecta, Hymenoptera, Argidae), in Japan, with notes on its immature stages and life history. *Jpn. J. syst. Ent.*, 13(2): 359-366.
- Shinohara, A., Wei, M. & Niu, G., 2013. Revision of *Siobla* (Hymenoptera, Tenthredinidae) from Japan. *Zootaxa*, 3746(1): 1-40.
- Smith, F., 1874. Descriptions of new species of Tenthredinidae, Ichneumonidae, Chrysididae, Formicidae & c. of Japan. *Transactions of the Entomological Society of London*, 1874: 373-409.
- Taeger, A., Blank, S. M. & Liston, A. D., 2010. World Catalog of Symphyta (Hymenoptera). *Zootaxa*, 2580: 1-1064.
- Takeuchi, K., 1939. A systematic study on the suborder Symphyta (Hymenoptera) of the Japanese Empire (II). *Tenthredo*, 2(4): 393-439.
- Takeuchi, K., 1941. A systematic study on the suborder Symphyta (Hymenoptera) of the Japanese empire (IV). *Tenthredo*, 3(3): 230-274.
- Takeuchi, K., 1952. A generic classification of the Japanese Tenthredinidae (Hymenoptera: Symphyta). Issued in Celebration of the Sixtieth Birthday of Kichizo Takeuchi by his Friends: 1-90. Kyoto.
- 竹内吉蔵, 1955. 日本の樹蜂. あきつ, 4(1): 1-9.
- 田中伸一・田中馨, 2007. 山口県のハバチ類. 山口のむし, (6): 101-114.
- Togashi, I., 1963. The genus *Platyxiphydria* Takeuchi from Japan (Hymenoptera, Symphyta). *Kontyu*, 31(2): 86-90.
- Togashi, I., 1972. Sawflies of Mt. Hiko, Kyushu (Hym., Symphyta). *Mushi*, 46(5): 53-64.
- Togashi, I., 1974. Symphyta of Shikoku, Japan (Hymenoptera). *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 12(1-2): 13-22.
- Togashi, I., 1980. Sawflies of the genus *Eriocampa* Hartig (Hymenoptera, Tenthredinidae) in Japan. *Kontyu*, 48(1): 35-41.
- 富樫一次, 1983. 新潟県産ハバチ類 (2) 中越地方のハバチ相. 越佐昆虫同好会々報, (56): 9-12.
- Togashi, I., 1990. A new *Eriotremex* from Japan (Hymenoptera: Siricidae). *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 19(3): 105-108.
- Togashi, I., 1997. Symphyta (Hymenoptera) collected by Dr. Y. Nishijima in Hokkaido, Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 52(1): 1-6.
- Togashi, I., 2003. A new species of the genus *Allantus* Panzer (Hymenoptera: Tenthredinidae) feeding on *Rhododendron reticulatum* D. Don (Ericaceae) in Japan. *Proc. Entomol. Soc. Wash.*, 105(4): 896-900.
- Togashi, I. & Nagase, K., 1992. Description of the larva of *Eriocampa babai* Togashi (Hymenoptera, Tenthredinidae). *Jpn. J. Ent.*, 60(2): 329-331.
- Wei, M., 2010. Revision of *Megabeleses* Takeuchi (Hymenoptera, Tenthredinidae) with description of two new species from China. *Zootaxa*, 2729: 36-50.
- 山田雅輝, 2000. 青森県から初めて記録するハバチ亜目の10種. 青森自然誌研究, (5): 53-54.
- 吉田浩史, 2002. 神戸市北区藍那のハチ類相 (1) ハバチ類. きべりはむし, 30(1): 62-65.
- 吉田浩史, 2006. 大阪府のハバチ・キバチ類. 24pls. + 128pp. 西日本ハチ研究会, 加古川.

#### 参考サイト

国立科学博物館 標本・資料統合データベース.  
<http://db.kahaku.go.jp/webmuseum/>



図 1 *Xyela tecta* ♂



図 2 *Arge enodis* ♀



図 3 *Arge enodis* ♂



図 4 *Allantus rhododendri* ♀



図 5 *Empria honshuana* ♀



図 6 *Empria honshuana* ♂



図 7 *Empria quadrimaculata* ♀



図 8 *Empria quadrimaculata* ♂



図 9 *Eriocampa kurumivora* ♂



図 10 *Corymbas chujoi* ♀



図 11 *Siobla apicalis* ♀



図 12 *Siobla apicalis* ♂



図 13 *Siobla ferox* ♀



図 14 *Siobla hirasana* ♀



図 15 *Siobla hirasana* ♂



図 16 *Siobla japonica* ♀  
(腹部の黄褐色部が消失したタイプ)



図 17 *Siobla metalica* ♂



図 18 *Siobla pulchra* ♀



図 19 *Siobla takeuchii* ♀



図 20 *Platyxiphidria miyakei* ♀

(注: 写真個体については, 標本の状態により選定したため, 必ずしも兵庫県産とは限らない)

## はじめての文化昆虫学 - みんなで文化昆虫学の研究をしよう！ Primer of cultural entomology – Let's study cultural entomology!

高田 兼太<sup>1)</sup>

**Abstract:** Cultural entomology examine influence of insect on human society and culture, and thus research subject of cultural entomology is not insects, but human, the society and culture, although rich knowledge of general entomology as natural science are needed to study cultural entomology.

昆虫は、世界のいたるところで普遍的に観察される生き物であり、人類の文化に少なからず影響している。それゆえに、人間の色々な文化事象に昆虫は度々姿を現す。たとえば、私達の生活をざっと見渡しても、生活用品にはテントウムシグッズがたくさんあるし、装飾品にはチョウをモチーフにしたものが数多くみられる。そして昆虫は、映画にも、漫画にも、文学にも、ゲームにも頻繁に登場する(例えば、Berenbaum; 1995; 小西, 2007; Meyer-Rochow *et al.*, 2008; Klein, 2012; 高田, 2010, 2013a; 保科, 2013)。

ところで、みなさんは「文化昆虫学」という学問をご存じだろうか? 1980年ごろに登場したかなり新しい学問分野なのであるが、文化昆虫学と聞いて正直とまどいを覚え、ぴんとこない人も多いことだろう。文化昆虫学はまさしく、上述したような昆虫が表象する色々な文化事象を対象に研究する学問で、人間社会や文化に対する昆虫の影響について調べることを目的とする(Hogue, 1980; Hogue, 1987; 三橋, 2000; 小西, 2003; 小西, 2007; 高田, 2010, 2013a; 保科, 2013)。たとえば、これまでに発売されたロック音楽CDジャケットの中で、どのような種類の昆虫が、どのくらいの頻度で出現し、またどのような表現方法で人々にどのようなイメージを与えているのかを研究するのである。ちなみに、ここに挙げた研究事例は、実際に存在するものである(Coelho, 2004)。

多くの人々によく勘違いされているように思われるのは、「文化昆虫学」と言う言葉の中の「昆虫学」と言う言葉に騙されるからなのか、文化昆虫学の研究対象は「昆虫」だと思われていることである。しかしながら、実際には、文化昆虫学の研究対象は「昆虫」ではなく、「人類とその社会、そして文化」である。簡潔に述べると、学問を自然科学(≒理系的な学問)と人文科学(≒文系的な学問)とに二分したときには、文化昆虫学は人文科

学に相当するのである。ただし、文化昆虫学は人文科学に属する学問といえども、昆虫と人とのかわりについて調べる以上、自然科学に属する一般昆虫学の知識も必要とし、また極めて学際的な学問(学問や研究が、複数の異なる領野にまたがっていること)である。それゆえに、文化昆虫学が何を主体に調べる学問なのかわからなくなってしまうのも当然なのかもしれない。

また、昆虫がかかわる文化と聞くと、食文化における生活手段としての昆虫食文化を想像される方が多いのではないだろうか? 実際には、生活手段としての昆虫食に関する研究事例は非常に多いと思われる。しかしながら、まず生活手段にかかわる昆虫食文化は、文化昆虫学の創設者 Hogue(1980, 1987) が提唱した狭義(本来)の文化昆虫学では主要な研究テーマではないことをここに述べておきたい。というのも狭義の文化昆虫学では、人間社会や文化事象の中でも特に知的営為にかかわるものを主な対象とし、生活手段にかかわる昆虫食文化の研究は原則として狭義の文化昆虫学の範囲に含まないのである。ただし、最近では、知的営為だけでなく生活手段にかかわる昆虫利用を含めた方がより柔軟に文化と言うものをとらえることができることから、生活手段にかかわる昆虫利用(昆虫食を含む)の研究もまた文化昆虫学に含まれるという考え方もあり(例えば、三橋 2000, 野中 2005), 筆者もその考えを支持している。さて前置きが長くなってしまったが、生活手段にかかわる昆虫食文化が文化昆虫学の領域に含まれるとして、まずは考えてほしい。食文化がいかに人類の生活において大きなウェイトを占めるのかが明白であっても、食文化は幅広い文化の中のひとつのジャンルにすぎないのである。また、狭義の文化昆虫学が対象とする知的営為にかかわるものだけでも、文化に含まれる事象はきわめて幅広い。多くの場合では、文化とは狭義の教養的文化をさすことが多いが、実際には大衆的文化や趣味的文化も存在する。

<sup>1)</sup> Kenta TAKADA 大阪市西淀川区

簡単にジャンルを並べても、文学、言語、音楽、神話、歴史、映画、漫画、アニメ、ゲーム等があげられるのである。また、食文化をとってみても、昆虫がかかわる食文化は昆虫食だけでなく、食品そのものや食品パッケージのデザインとして昆虫が利用されることもある(たとえば、前者の例としてはTakada(2013)、後者の例としては高田(投稿中)がある)。このように文化昆虫学は、極めて広大な文化事象を扱う学問分野なのである。

実際に文化昆虫学の研究を行うにあたっては、基本的には人間社会や文化事象に対する昆虫の影響(昆虫の役割やインパクトなど)に関する問題であれば、比較的自由的な発想でテーマを決めることができる。先の例では、Coelho(2004)のロック音楽のCDジャケットの研究をあげたが、たとえば宮ノ下(2006)のように特定の漫画作品(ハートカクテル)における昆虫の役割について論じてもよいし、高田(2013b)のようにある地域の昆虫(ハサミムシ)の方言について論考しても、保科(2013)の11章のようにカブクワという呼び方についてカブトムシの方がクワガタムシより先に呼ばれる理由についてつきつめて考えるのもよいのである。実際に研究をする際には、まずは特定の文化事象に対して、①どんな昆虫が、②(複数種が表象する場合は)それぞれの種がどれくらいの頻度で、③どのような形態の変化(デフォルメ)がほどこされて、④どんな役割やイメージをもって表象しているのかを意識して調べればよいだろう。あるいは、⑤どんな文化事象に昆虫が表象していたかを記録するだけでも、場合によっては(発見自体に新規性があるか等)かまわないと思われる。

本報告文では、新興学問である文化昆虫学が世の中に広まってほしいという想いをこめて、私なりの文化昆虫学の紹介をさせていただいた。拙著報告文を読んで、少しでも文化昆虫学について理解していただき、あるいは興味をもていただければ幸いである。文化昆虫学は、まさに昆虫学と人類学との接点であり、人間が自然と共存する上で必要な自然観について考える上で重要である。

## 文 献

Berenbaum, M. R., 1995. *Bugs in the Systems*. 222 pp. Addison-Wesley Publishing Company, USA.

Coelho, J. R., 2004. Insects in Rock and Roll cover art. *American Entomologist*, 50(3): 142-151.

Hogue, C. L., 1980. Commentaries in cultural entomology. 1. Definition of cultural entomology. *Entomological news*, 91(2): 33-36.

Hogue, C. L., 1987. Cultural entomology. *Annual Review of Entomology*, 2: 181-199.

保科英人, 2013. アキバ系文化昆虫学～2次元世界の美少女の虫たちへの想い. 426 pp. 牧歌舎. 兵庫.

Klein, B. A., 2012. The curious connection between insects and dreams. *Insects*, 3: 1-17.

小西正泰, 2003. “文化昆虫学序説”. 三橋 淳(編), *昆虫学大事典*. pp. 1103-1104, 朝倉書店, 東京.

小西正泰, 2007. *虫と人と本と*. 519 pp., 創森社, 大阪.

Meyer-Rochow, V. B., K. Nonaka & S. Bouldam, 2008. More feared than revered: Insects and their impact on human societies (with some specific data on the importance of entomophagy in a Laotian setting). *Entomologie heute*, 20: 3-25.

三橋 淳, 2000. 文化昆虫学とは. *遺伝*, 54(2): 14-15.

宮ノ下明大, 2006. 「ハートカクテル」にみる昆虫たち - 四季と昆虫 -. *家屋害虫*, 28: 91-95.

野中健一, 2005. *民族昆虫学: 昆虫食の自然誌*. 202 pp. 東京大学出版会, 東京.

高田兼太, 2010. 文化甲虫学: 甲虫の文化昆虫学概説. *甲虫ニュース* 170: 13-18.

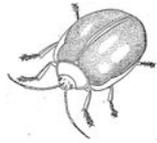
高田兼太, 2013a. 文化昆虫学のススメ. *Nature Study*, 59: 14-15.

高田兼太, 2013b. ハサミムシの不名誉な俗称. *きべりはむし*, 36 (1): 20-22.

高田兼太, (投稿中). 食品パッケージに見られるレアな昆虫の事例: 珉珉食品株式会社の「せみ餃子」.

Takada, K., 2013. Ladybug-shaped Chocolate on a Mousse Cake Bought at a Bakery in Amagasaki City, Japan. *Elytra*, Tokyo, NS, 3:195-198.

# たんぽう



## 兵庫県佐用町でクロカタビロオサムシを採集

三木 進

2013年5月9日、佐用郡佐用町佐用の佐用坂近くの山道でクロカタビロオサムシ *Calosoma maximowiczii* 1♂ (写真) を採集したので報告する。



午前10時ごろ、幅1メートルほどの山道を歩いていた。

また、佐用町昆虫館の入館者が、生きた本種をケースに入れて持っておられ、尋ねたところ、2013年4月14日に、たつの市龍野町中霞城の龍野公園で道を歩いていたものを捕獲したという。

ゾウムシなどの研究者、沢田佳久さんが雑誌「季刊レポ」の「ヒビムシ」に寄せられた情報によると、神戸市の菊水山でも2012年以降見られ、2013年には普通種になったという。

クロカタビロオサムシは、樹上でガの幼虫を食べ、ブナアオシャチホコ、マイマイガなどの幼虫が大発生したときに増えるという。確かに2012年、2013年とマイマイガが県南部で多くみられ、明石の自宅でも多数を確認、マンションの壁に卵塊が産み付けられている。

この傾向は東日本で顕著で、北海道、長野、岐阜などでマイマイガの大発生がニュースになっている。大発生は2、3年続き、周期は10年ほどだという。

2014年も、クロカタビロオサムシに出会えるかも知れない。

(Susumu MIKI 兵庫県明石市)

## 兵庫県明石市西部で灯火に飛来したナニワトンボ

三木 進

2013年10月5日、明石市大久保町西島にある自宅マンションの蛍光灯に、ナニワトンボ *Sympetrum gracile* 1♂ (写真) が飛来したので報告する。



午後10時ごろ、マンション4階の廊下天井の20Wの蛍光灯に、何度もぶつかっているトンボを採集すると本種だった。

「兵庫の貴重な自然・兵庫県版レッドデータブック(昆虫類)2012」によるとCランクで、明石市内にも記録はあるものの、灯火に来た例でもあり報告する。

周辺には赤根川が流れ、ため池までは500メートルほど。しかし、周囲が樹林に被われたような環境はない。

### ○参考文献

兵庫県農政環境部環境創造局自然課, 2012. 兵庫の貴重な自然, 兵庫県版レッドデータブック(昆虫類). (財)ひょうご環境創造協会, 16pp.

(Susumu MIKI 兵庫県明石市)

## きべりはむし 投稿案内

### 1. 内容

「きべりはむし」は、老若男女を問わず、昆虫に関心のある読者を対象とし、兵庫県ならびに地域の昆虫相、昆虫の採集・観察・飼育の記録や方法、昆虫学の解説、昆虫を題材とした教育や地域づくりに関する記録や方法などの、未発表の報文を掲載します。

### 2. 編集・発行

「きべりはむし」は、兵庫昆虫同好会の機関誌ではなく、独立した雑誌とし、「きべりはむし編集委員会」が編集し、「兵庫昆虫同好会」と「NPO 法人こどもとむしの会」が共同で発行します。巻号は、兵庫昆虫同好会発行の「きべりはむし」の継続とします。

### 3. 著作権

掲載報文の著作権は、「NPO 法人こどもとむしの会」に帰属するものとします。

### 4. 体裁・媒体

本誌の判型は A4 判とし、横書き 2 段組とします。本誌は、Adobe PDF 形式による電子ファイルとして出版し、データは「NPO 法人こどもとむしの会」の web サイト (<http://www.konchukan.net/kiberihamushi>) からダウンロードできるものとします。また、紙媒体による印刷物を別途製作し、希望者に時価で頒布します。

### 5. 投稿者

本誌への投稿者には特に制限を設けません。

### 6. 原稿提出時のお願い

原稿は、原則としてデジタルデータでおねがいします。以下を参考に、文字部分と、図や表の部分は別々のファイルとして提出ください。従来通りの紙原稿でも受付しますので、ふるって投稿ください。

#### 1) 文字部分

図表以外の部分と図表のキャプションは、1つのファイルとして、リッチテキスト形式 (.rtf) で保存してください。ゴシック体、イタリック体などの書体も指定ください。原稿は、一般に、表題、著者、要旨、本文、謝辞、文献で構成します。本文が数ページに及ぶ報文の場合は、本文の前に 400 字以内程度の要旨をつけることも可能です。文献、ホームページの引用は、一般的な学術雑誌の例にならってください。

#### 2) 図表

それぞれの図表ごとに別々のファイルとして作成し、jpeg、psd、pdf などの形式で保存してください。また画像データにつきましては可能な限り、高解像度での保存をお願いします。図表の幅は、1 段または 2 段分となります。原則として、単純な拡大縮小以外は行わず、そのまま印刷に供しますので、図表中の文字サイズは、刷り上がりの方の大きさを考えて適切に設定してください。また、写真のトリミングは、適切にトリミングしたものを提出してください。著者以外が作成した地図や、人物が写っている写真を用いる場合は、事前に、著作権者や本人の承諾を得ておいてください。

### 3) レイアウトの案

可能な場合は、原稿提出時に、レイアウトの大まかな案をつくっていただき、.pdf などの形式でいただけると助かります。

## 7. 原稿送付先

きべりはむし編集委員会 kiberihamushi@konchukan.net  
〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学農学部昆虫科学研究室  
NPO 法人こどもとむしの会 事務局

## 8. 原稿の修正, 採否等

編集委員会は、内容や文言の修正を著者に求めることがあります。また趣旨に合わない原稿は掲載をお断りすることがあります。

## 9. 投稿者, 原稿内容に関する問い合わせ

個人情報保護の観点から、投稿者個人の連絡先は明記しておりません。お問い合わせ等につきましてはきべりはむし編集委員会メールアドレス kiberihamushi@konchukan.net, もしくは  
〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学農学部昆虫科学研究室  
NPO 法人こどもとむしの会 事務局 までお願いいたします。

## 10. ISSN について

きべりはむしは第 32 巻第 2 号からオンラインジャーナルの PDF 版が正式版となりました。これに伴い、ISSN(国際標準逐次刊行物番号 :International Standard Serial Number) を取得しました。ISSN とは、雑誌などの逐次刊行物の情報を識別するための国際的なコード番号です。

・参考 web サイト

ISSN 日本センター : <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/issn.html>

## 編集後記

- 今号に掲載された近藤さんの報文にもあるように、兵庫県内におけるニホンジカの影響は深刻度を増し続けています。早急な対策が必要である事は言うまでもありません。編集子は狩猟免許の取得を真剣に考えています。
- 森さんによる兵庫県のアトキリゴミムシ目録が完結し、吉田さんによる兵庫県のハバチ・キバチ類の追加記録が報告されました。これらを基に昆虫相調査にもさらに弾みがつくと思われます。このようなリストは非常に重要な情報ですので、次号以降も継続していければと考えています。
- 高田さんによる文化昆虫学の報文は、日々の暮らしの中において新鮮な視点を与えてくれます。昨年10月に誕生した長男の枕元にあるおもちゃを見てみると、テントウムシ、イモムシ、チョウなど昆虫をモチーフやデザインにあしらったものが複数あります。このように文化昆虫学的ネタというのはいろいろな所に転がっていることを改めて気づかされます。
- 次号第37巻第1号は2014年12月末の発行の予定です。皆様の投稿お待ちしております。

(編集長 中峰 空)

### きべりはむし 第36巻 第2号

2014年3月25日 発行

編集 きべりはむし編集委員会

発行 兵庫昆虫同好会・NPO 法人こどもとむしの会

事務局 きべりはむし編集委員会 kiberihamushi@konchukan.net  
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学農学部昆虫科学研究室  
NPO 法人こどもとむしの会 事務局気付

きべりはむし web サイト：<http://www.konchukan.net/kiberihamushi>

## きべりはむし 第36巻 第2号 目次

### 【報 文】

ニホンジカ高密度地帯のノコンギク花畑に集中する多数のオオウラギンスジヒョウモン その2 (2013年) .....	近藤伸一	1-5
兵庫県のアトキリゴミムシ類 (2) .....	森 正人	6-14
兵庫県産ハバチ・キバチ類の追加記録 .....	吉田浩史	15-25
はじめての文化昆虫学 - みんなで文化昆虫学の研究をしよう! .....	高田兼太	26-27

### 【短 報】

兵庫県佐用町でクロカタビロオサムシを採集 .....	三木 進	28
兵庫県明石市西部で灯火に飛来したナニワトンボ .....	三木 進	28

投稿案内 .....		29-30
------------	--	-------

編集後記 .....		31
------------	--	----